福島菊次郎個人アーカイブズの構築と資料活用に向けて
―体制整備と基礎調査：写真パネルおよび遺品整理を中心に―

高橋清貴・土屋昌子

Progress Report on the Development of Personal Archives of Kikujiro Fukushima: Towards the Active Utilization of Photo Panels and Relics for Education and Research

Kiyotaka Takahashi, Masako Tsuchiya

要旨

本稿は、報道写真家として日本社会の戦後史を見つめ、原爆、公害、三里塚、自衛隊などをテーマに優れた作品を残した福島菊次郎氏（1921-2015）[1]の遺品の整理と保存活用に向けた体制作りについて、保存会（後述）と花と平和のミュージアム[2]が共同で検討してきた成果を紹介する。写真パネルを中心とする遺された資料は、個人アーカイブズとして公開、活用を目指すものである。

福島菊次郎氏が生前に制作し、全国で巡回展示が今も続いている写真パネルは、写真家本人が制作した展示会開催のためのツールであり、写真家が遺した作品として稀有なものであると同時に、その保存性の高さからも貴重な作品群であるといわれる。この写真パネルの保管を保存会から委託された本学園の花と平和のミュージアムは、写真パネルと共に、自宅に残された資料の調査に取り掛かり、旧蔵書の整理以降５年が経過したことを期に、課題の確認を行った。

保存会は2014年に東京都多摩市で行われた写真展「福島菊次郎全写真展殺すな、殺されるな」（12月パルテノン多摩）「写真で見る日本の戦後」（多摩市）の実行委員会が母体となって結成された、いわば晩年の福島氏から写

真パネルを託された市民団体である。現在も写真パネルの貸し出しを行う一方、展示会も行っている。

キーワード：福島菊次郎、収集、保管、管理、視聴覚教材
Key Words：Kikujiro Fukushima,Collection,Strage,Manegement, Visual aids

1．はじめに

1.1　研究会の成り立ちと福島菊次郎について

写真家福島菊次郎氏が撮影し、自ら作成した写真パネル約430枚（貼られている写真約2000点）を花と平和のミュージアムで保管することになった経緯は、恵泉女学園大学の川島堅二前学長に対し多摩市長及び同市で平和教育活動に取り組む市民等から要請があったことから始まる。その後、福島氏自身からも直接依頼があり、これを花と平和のミュージアム（以下、ミュージアム）の上位意思決定機関である学園運営委員会で諮ったところ、正式に受け入れを決定したものである。

受け入れの形態に関しては、劣化が進んでいる写真パネルの管理責任を明確にするために、保存と活用に積極的に取り組む市民団体「福島菊次郎写真パネル保存会」（2016年６月発足）が所有することとし、ミュージアムは一定の保管料を払ってもらうことで保管場所を提供することとした。しかし、この保管契約においては、単に物理的に保管スペースを提供するということではなく、福島氏自身の希望であった多くの若者に観てもらいたいという遺志を継ぐ意味で、保管場所を提供するミュージアムに対する便宜供与が含まれている。具体的には、ミュージアムは、教育及び調査研究の目的であるならば当該写真パネルを、学園内部において自由に活用できることが両者の間で合意されている（ミュージアムのサテライトなど、どこまでを「内部」と見なすかについては相談）。これまでも学園の恵泉デーや大学のスプリングフェスティバル（2019年からスプリングフォーラム）、恵泉祭、STEP 授業などで積極的に展示を行ってきたが、学生のみならず来校者や地域住民に貴重な学びの機会を提供してきている[3)]。

日本の国家暴力や差別社会の実態を赤裸々に暴き出す福島氏の写真とそれを自らの言葉で解説した文章を掲示しているパネルは、現代の日本において

考えるべき視点や素材を提供してくれる貴重なものである。一方、写真が撮影された戦後の時代背景を色濃く反映したものでもあり、加えてきわめて強いメッセージの政治性のために、同時代を生きた人々に衝撃を与えた半面、そうではない人たちに敬遠されがちな面を持つこともたしかである。写真家としての福島菊次郎氏は1961年に原爆をめぐる記録写真集として刊行した『ピカドン ある原爆被災者の記録』で日本写真批評家協会賞特別賞を受賞し脚光をあびたが、その後写真史にはほとんどその名をとどめてこなかった[4)]。また、一部のパネルでは、福島氏の思い入れが強すぎたためか、写真の配列順序が曖昧であったり、解説文の内容に偏りや事実関係において間違いが散見される。

このため、写真パネルを現代の大学生や社会人に向けて適切な教育・啓発教材として活用するためには、キャプションや解説文の史実とのすり合わせ、解説の補足などの整備が必要である。同時に、ミュージアムとしては、パネルを現代社会の文脈に位置づけて発信する目的で、写真家個人の生き方やその時代の社会的背景を説明する資料の追加なども必須と考えられる。福島氏の写真が映し出す戦後の日本社会の問題を、今の大学生が少しでも自分に関わる問題として受け入れ、写真が証言する現場の状況とその時代背景を的確に読み解きながら学べるようにする必要があると考える。

この観点から、福島氏の晩年の居宅に残されていた様々な資料（日記や取材ノート、参照資料、スナップ写真、未定稿など）を、ご遺族の意向をふまえて、ミュージアムの資料として保管・受け入れることとした。受け入れた遺品は、写真パネル（保存会所有）及び写真ネガ（共同通信社所有）を除き、福島氏が亡くなる直前まで住んでいた山口県柳井市のアパートの一室にあったものほぼすべてである。福島氏が生活費を捻出するために制作していた彫金関係のものは遺族が引き取り、仕事道具であるカメラ機材などは生前親しかった写真家に譲り受けてもらい、残された蔵書、福島氏が取材したビデオ、録音テープ、日記、取材ノート、手紙、スナップ写真、新聞記事、原稿などをミュージアムで保管することとなった。以下が受け入れた際の遺品の概要と分量（段ボール・サイズ400×300×300Hで換算）である。

・福島氏の著作本・掲載された書籍・雑誌類（段ボール４箱）
・一般書籍、ビデオ、録音テープ（段ボール19箱）

・原稿（段ボール１箱）
・メモ・手紙・写真パネル（小）（段ボール１箱）
・写真パネル・賞状（ガラス）（段ボール１箱）
・使用していたワープロ機・トロフィー・写真パネル（大）（段ボール１箱）

これに加えて、福島氏が取り上げられた映像やメディア記事のスクラップがあるが、これらは晩年、福島氏の側で生活支援をしていた森田雅和氏によって一部リスト化とデジタル化が終了している（リスト化・デジタル化の最終化が必要）。段ボール４～５箱程度。

・新聞スクラップ（スキャンしてデジタル化）
・VHS ビデオ（タイトルのリスト化）
・取材ノート（リスト化とスキャン）
・スナップ写真（スキャンしてデジタル化）
・日記（リスト化とスキャン）

これらの資料は今後の福島菊次郎研究に役立つとともに、教育資源として活用することができる。例えばこれら遺品と写真パネルを組み合わせて展示していくことで、撮影者が生きた時代を撮影者自身がどのように見ていたかを合わせて展示することが可能になり、生きた教材としての可能性が拓かれる。福島氏は生前学園関係者に対して「僕は作品を若い人たちに観てもらいたいの。だから写真パネル以外の遺品もすべて大学に寄付したい。」と述べられた。この言葉を受け止め、遺された貴重な資料を活かしていくために、その整理と分析を目的とした研究会を、高橋と花と平和のミュージアム事務局の土屋、ご遺族、保存会メンバー、それに上述した森田氏を加えて2018年に発足させた。

１.２　調査・研究の成果

・写真パネルのキャプションの検討と確認
・遺品の整理作業

それぞれの結果については次節で詳述するが、全体として作業は計画の概

ね７割程度進めることができたと考えている。

写真パネルのキャプションの検討については、写真パネルに貼られた写真を一枚一枚、福島氏の写真集や撮影メモなどとつき合わせ、撮影された年月日を可能な範囲で確認し、その時代背景や史実を関連書籍や日記をもとに洗い出す。この作業は日本現代史を専門とする神子島健氏（保存会メンバー）が、2014年にパルテノン多摩で開催した「全写真展」の解説文を執筆したことから、担当となった。しかし、写真パネルの史実との突き合わせという作業は、相当の時間を要するため、可能な範囲で少しずつ進めてもらっている。写真パネル全体については調査の途上であり、本報告書では、その一部を紹介するに止める。

遺品の整理作業については、概ね計画通り進めることができた。作業中、最も手間と時間を費やしたのが、2018年４月に「アパートの押し入れの奥に段ボールが３箱あった」ということで送られてきた写真の整理と保管作業、および柳井市のアパートから送った大量の書籍（段ボール約23箱）の整理と分類（箱出し、点数確認、簡易クリーニング、蔵書に付されたメモや手紙の整理、リスト化、図書分類記号の貼付、書架への配架）であろう。前者の写真は福島氏が撮影、現像したものと思われ、印刷用に提出原稿として体裁が整えられているもの、掲載写真として採用されなかったものなどが含まれるため、写真家としての福島氏の仕事ぶりを伝える貴重な資料であり、その保管にあたっては慎重な対応が求められた。また、後者にあっては、一部には福島氏の付した付箋などが残っていたため扱いが難しく、また旧蔵書には雑誌・冊子類も多数含まれるため、森田氏作成の蔵書目録を元に作業を行ったが、新たに作成した部分も多い。こうした作業を限られたマンパワー（主にはミュージアム担当土屋と保存会メンバー）によって完了できたことは、研究会として十分に評価に値すると自負する。

最後に、今後の課題だが、上述したように本学の助成を受けた１年間は主に写真パネルと遺品資料の整理に集中し、さらに１年をかけて概ねその作業を完了させることができた。しかし、データ化されている資料の最終化（目録作成もしくはデータベース化等）、および初期の目的である若者への平和教育教材として整えていくための作業が、今後の課題として残されている。したがって今後も研究会は継続させ、まずは残された写真パネルのキャプションの分析を進めた後、コロナ禍で活動は限られてくるとは思うが、写真

パネル展示の機会に、教材としての活用方法と教材化（展示キットの作成など）の検討を引き続き行っていきたい。

２．調査・研究報告

写真パネルの整理と分析

福島菊次郎氏は1988年末に入院中、昭和天皇裕仁の逝去（1989年１月７日）に至る「下血報道」に接し昭和天皇の戦争責任を問う写真展を構想。退院後から準備に取りかかり、1989年５月から『昭和を問う―写真で見る戦争責任』『9000人の証言―写真で見る戦争責任』などと題した「天皇の戦争責任を問う」写真展を全国で開催した。これはパネルにした写真を市民団体に貸し出す方式で、全国162か所の会場で開催された。

その後、福島は1999年に下関市に写真資料館を開設し、ここに「天皇の戦争責任展」以後10年がかりで制作した総点数3300点の作品群「写真で見る日本の戦後」を収蔵、常設展示し、全国に貸し出しをおこなった[5)]。保存会が所有する写真パネルは、福島自身が撮影、現像した写真に、キャプションをつけて編集し完成させた彼自作の作品である。

パネルは、写真とキャプションが92cm ×92cm の合板に並べられている。一つのパネルにタイトルやキャプションとともに４枚～７、８枚の写真が掲載され、写真は大きいもので全紙サイズ（45cm ×56cm）、小さいものは10cm ×10cm までさまざまである。1989年に作成された写真パネルは、敗戦直後から撮影を続けた20万枚のフィルムから約250点を厳選したもので、最終的に全国巡回のために三組の写真パネルが作成された。最初に作成したのはＬ版（90cm ×180cm）であったが、重量が重く、展示会に不向きであることが判明し、その後扱いやすいサイズに変更された。

「福島菊次郎写真パネル保存会」発足の元となった福島菊次郎展 TAMA 実行委員会は、この写真パネルを活用して、2014年12月に多摩市のパルテノン多摩で「福島菊次郎全写真展」を開催した。その際、実行委員会は使用したパネルをもとにリストを作成している。

それによると2014年の時点で確認されている写真パネルは369枚で、写真点数は計2,000枚となっている。15テーマに分かれており、福島本人の構想においては23テーマだったが、この内３テーマは未完で、20テーマのうち５テーマのパネルは行方がわかっていないと記載されている。

2017年に恵泉に受け入れた際、全点調査を行ったところ、パネル数は384点であった。2014年に作成されたリストに含まれていないＬ版(大型パネル)３テーマを確認した。Ｌ版は大きさと重量により展示されなかったため、リストから除かれていたものである。

写真パネルは現在も続けられている展示会の貸し出しの便宜をはかるために、保存会によって画像データが作成されている。データ上で保管が確認できるパネルの点数は368枚である。以下に、写真パネルの保管点数を示す。タイトルはパネルの裏面に手書きで書かれているテーマの略称である。元のテーマとの照合のため、省略されているものは右に元のテーマを「」で示す。

２.１　写真パネルのテーマと保管点数

① 原爆「原爆と人間の記録」(22枚、Ｌ版17枚)
② ピカドン（24枚）
③ 捨てられた日本人（22枚）
④ 自衛隊「自衛隊と兵器産業」(24枚)
⑤ 学生運動「全共闘運動の軌跡」(27枚)
⑥ ウーマンリブ「女たちの戦後」(23枚)
⑦ ふうてん「ふうてん賛歌」(29枚)
⑧ 三里塚「三里塚からの報告」(27枚)
⑨ 公害「自然と人間破壊の構造－公害日本列島」(28枚)
⑩ 瀬戸内物語「瀬戸内離島物語」(30枚)
⑪ 鶴のくる村（22枚）
⑫ 戦責「写真で見る戦争責任」(27枚)
⑬ 天皇の親衛隊（22枚）
⑭ ある老後（20枚）
⑮ 総論（20枚）

実行委員会が作成したリストには、このほかに「原発が来た」(22枚）がある。2014年の「全作品展」では展示されたものだが、ミュージアムには保管されていない。また、保存会が作成したデータの中にも含まれていない。

2.2　写真パネル「キャプション」の検討

福島が自作の写真パネルに付したタイトルおよびキャプション（解説）は本人が記述したもので、ジャーナリストとしても評価の高い福島菊次郎の面目躍如といってよく、写真と一体となって、写真パネルの作品としての価値を高めている。

しかし、本研究会において記述内容について、日付、数値データ、事実関係などについて若干修正を必要とする部分があることが指摘された。保存会でも以前から話題になっており調べ始めていたということであった。研究会では、パネル保存会にこの調査を進めてもらうことを改めて確認した。基礎調査は、まだ継続中であるが、これまでに保存会が行った写真パネルの分析調査の一部（「自衛隊と兵器産業」写真パネルの分析）を一例として紹介する。

2.3　キャプションの検討例「自衛官と兵器産業」

写真パネルのキャプション（解説）検討：「自衛隊と兵器産業」を例に

はじめに

福島菊次郎写真パネル保存会は、パネルの保存と簡単な補修とともに、恵泉女学園大学と協力しつつパネルの内容に関する調査も考えている。著作、雑誌記事リストなどはすでに作成済みであるが、調査の進捗状況ははかばかしくない。とはいえ、今後の利用を考えれば、調査の必要性があることは間違いない。

ここでは、展示に協力していただいた元自衛官によるパネルの記載内容の検討から明らかになった「自衛官と兵器産業」のパネルについての事例を紹介する。これは元自衛官の方のコメントを基に担当者が確認、補足を行ったものである。

「自衛官と兵器産業」

90㎝×90㎝の正方形パネルの写真は、存在が確認されているもので全15テーマある。そのうちの一つに「No. 7　自衛隊と兵器産業」がある。これは1970年代、自衛隊や兵器工場に取材を行い、オフレコのところなどもひそかに撮影して、大きな話題となった写真を集めたものである。

このテーマのパネル No. 1には、テーマの説明の中に、戦争が終わり新憲法が制定され、「その日から50年が過ぎたいま」という表現がある。パネル No. 2を見ると、防衛費について「95年予算は4.5兆円で米国に次ぐ世界第2位の軍事大国になった」とある。ただし実際は約4.7兆円なので、このずれが何によるのかはっきりしない。

予算案は前年9月ごろには概算要求が出され大枠が決まり、若干の変更はあっても当初予算は大きな変更なく決まることが普通である。1995年も、1月に阪神淡路大震災があったものの、年度内に成立している。94年夏ごろから95年の成立の間のどこかの段階で、見込みで4.5兆円と書いた可能性があるが、いずれにせよ、このテーマの作成時期は94年か95年頃であると推測できる。

パネル No. 2にはイージス艦の記述がある。イージス艦は1980年代末、まさにパネル作成が始められた時期に、自衛隊への導入の是非が問題になり、1993年3月に最初に配備されている。これは福島菊次郎本人のパネル作成時の問題意識が投影されたものだが、パネルには70年代の写真が並んでおり、見ている側にとっては、前提知識がないと誤解を生む。

同じ解説部分には、「自衛隊の常備兵力は陸上自衛隊27万」と記載されているが、これも1980-1990年代における陸海空の全体での定員を意味し、しかも実数（現員）は定員割れしており、24万人程度であった。ちなみに現在の定員は25万人弱、実数は23万人弱である。ここでも当然、現時点の情報とのズレは発生する。

写真撮影と解説の時期のズレ

こうした問題は、過去のものを現在に展示することによる一般的なズレ、ということも言える。だがイージス艦の例に見られるのは、もう少し複雑な問題である。福島菊次郎が報道写真家として活躍した1960年代から70年代にかけて主に撮影された写真を、本人が80年代終わりから90年代にかけて再構成して作成されたのが、この写真パネルの特性である。展示される写真の撮影時期と、解説を書いた時点のズレが存在する。しかも福島菊次郎が社会的な問題意識の強い人物であるがゆえに、書いた時点の問題意識が強烈に反映されているだけに、前提知識の少ない閲覧者には解説が必要だともいえる。

以上の点は、福島菊次郎の活動を今に伝える資料的価値、写真自体の価値を損ねるものではないものの、（特に本人が想定したと思われる）現在における市民活動の場での展示の際には注意が必要である。

このような解説上のズレやミスは、ほかにも何点か指摘されている。まだ確認が不十分なためここには書かないが、今後の調査が必要なことは確かである。ちなみに、現在の閲覧者に対する補足をどうするかという問題はまた別に存在する。

戦争の時代どころか「戦後」も歴史となって証言できる人が減っていく中で、当時の関係者も交えて若い世代（学生など）が、写真パネルの解説内容の確認、補足などをしていければ面白いかもしれない。

（担当：神子島健）

3．遺品の整理と分析

本学ミュージアムに寄贈された遺品は、旧蔵書および写真を主体とする。その他モノ資料は、生前福島が使用していたワープロ、北海道東川町「写真の町東川賞飛騨野数右衛門賞」（2015年）の賞状の額など数点である。

なお、2016年６月に東京都府中市で福島菊次郎追悼写真展講演会が開催された際、スタッフとして参加した森田氏よりデータ化された資料の存在が知らされた。これについては保管データとして後述する。

3.1　図書

冊数　720冊

ISBN あり　359　ISBN なし　358

（入手経緯）図書類は2016年秋に段ボール約30箱で届いた。高橋、妹尾ら研究会のメンバーがご遺族とともに柳井市で住まわれていたアパートに出向いて箱詰めを行った。この時点で書籍リストは森田氏が作成されていた。

（整理と分類）箱出し、点数確認、簡易クリーニング、蔵書に付されたメモや手紙の整理、リスト化の作業を経て、閉架式で館内閲覧ができるよう図書分類記号を付すこととし、2019年７月に図書分類による配架を完了した。一部福島氏の付した付箋などを残している。旧蔵書には雑誌・冊子類も多数

含まれる。

（特徴）福島氏の旧蔵書はISBNが付与されていない時代のものや私家版、自費出版本も多く、帯、蔵書に挟まれたメモや手紙、写真などが少なくない。これらを別途保管した。ファイル3冊に収めている。

個人アーカイブズにおける図書資料の整理については、史料学的な整理方法として福島氏の書斎に保管されていた当時の並び順を再現する方法をとる場合がある。そのことによって旧蔵者独自の整理方法などが観察される場合もある[6)]。しかし福島氏のケースでは、再現はほぼ不可能であった。また、日本十進分類法（DNC）で配列した場合、氏の蔵書の特徴として、社会科学系の図書のほか、自然科学、詩・文学関連の図書が多い傾向があり、図書館学に基く分類による配架順を採ることによりそれらが可視化できる利点があると考えた。

3.2　写真

数量；写真合計　2,613枚　　コンタクトプリント合計　355枚

内容；『原爆と人間の記録』『瀬戸内離島物語』『公害日本列島』等に掲載された写真。

（入手経緯）これらの写真は、2018年4月に「アパートの押し入れの奥に段ボールが3箱あった」ということで送られてきたものを開封したところ、焼いた写真が紙袋に分けて入れられ黒いビニール袋に包まれた状態で出てきた。長期間そのままで保管されていたものと思われる。写真の大きさはばらばらだが、おおよそA4版以下、1点物のほか、コンタクトプリントが多数含まれていた。そのままでは写真同士が張り付いてしまう状態だったため、2019年5月からリハウジングを行った。リハウジングとは資料の包装状態を適切な状態に改めることで、今回は1点ずつ薄葉紙と共に透明のPP袋に入れて点数を数え、保管箱に入れ換えた。写真が入っていた紙袋は書籍名や目次が付されていた（別途保管）。

（整理状況）刊行された書籍ごとに袋分けされていた状態から、写真は福島氏本人による撮影、および現像のものと思われる。印刷用に提出原稿として体裁が整えられているもの、掲載写真として採用されなかったものなどがある。コンタクトプリントは、2009-2010年にかけて『デイズジャパン』に

福島氏の生涯の歩みが連載（10回）された際に、担当者の手配により焼き増しして福島氏宛に送付、これをもとに福島氏が写真をセレクトしたものと考えられる。

数量点検および内容確認のためにリストを作成した(旧蔵写真リスト添付)。

3.3　モノ資料

・額（賞状）　北海道東川町「写真の町東川賞飛騨野数右衛門賞」(2015年)
・トロフィー　日本写真批評家協会賞特別賞（1961年）
・ワープロ
・写真　パネル加工されたもの、僧侶の焼身自殺の写真などを含む。
　　（数量未確認、未整理)。
・ゲラ　「写らなかった戦後」シリーズのゲラ（未整理）
・福島さんのスナップ写真、小型額入り（遺影）

3.4　保管データ

【概要】

データ作成者は柳井市在住の森田氏である。森田氏は2012年に劇場公開された福島菊次郎氏のドキュメンタリー映画「ニッポンの嘘」(長谷川三郎監督)の上映会を地元柳井市で企画したことをきっかけに福島氏と出会い、その後自宅が近隣であったこともあり交友関係を結び、次第に身の回りの世話や、テレビや新聞・雑誌などメディアからの取材対応まで行うなど、晩年の福島の日常生活をサポートした。福島氏個人やその家族、知人らから信頼を受け、福島氏没後はアパートの管理をするとともに、蔵書類や写真、各種資料、ビデオなどの整理と記録（主にデジタル化）を始め、2017年１月にアパートを引き渡すまでにおおよその資料整理を完了させた。

森田氏がまとめた資料のデータは、一つのファイルに収められている(ファイル名 Kikujiro_Fukushima)。元の資料の現物は現在、森田氏が保管している。

この中には作家研究の材料として、今後調査を必要とする貴重な資料も含まれる。今回は、１点物の資料の中から福島氏の手書きのノート「アラビア日誌」(1961年)、福島氏が作成したＡ４版61頁『福島菊次郎全仕事集1945→1994』(福島菊次郎の写真展を成功させる会編　1994）などの存在を指摘するに留める。

ファイル　Kikujiro_Fukushima
　構成（階層式）

第１階層（項目）：
フォルダ１（others）、フォルダ２　福島菊次郎の本・写真、フォルダ３　戦後70年特別企画　アーサー・ビナード「探しています」、フォルダ４　Audio　フォルダ５　Documents、フォルダ６　Documents-unpublished data、フォルダ７　Photo、フォルダ８　Video、フォルダ９　国立国会図書館デジタルデータ

第２階層
- フォルダ１（others）
　　20130420「ニッポンの嘘」柳井上映会
　　20160801_Kikujiro Files list（□□□に DVD を送付）
　　20160808_Fukushima_kikujiro（□□□に送信）
　　20160908_kikujiro_Fukushima file list（□□□へ送付）
　　20170500_u_presscenter.jp
　　下関資料館会報 No. 1
　　福島菊次郎年表
　　福島菊次郎の名刺（スキャン）
　　以下１点もののデータ123点
- フォルダ２　福島菊次郎の本・写真
　　ピカドン（東京中日新聞）
　　ガス弾の谷間からの報告（MPS 出版部）
　　迫る危機　自衛隊と兵器産業
　　原爆と人間の記録（社会評論社）
　　日本の戦後を考える　戦後の若者
　　公害日本列島（三一書房）
　　戦場からの報告　三里塚・終わりなき戦い
　　天皇の親衛隊（三一書房）
　　戦争がはじまる（社会評論社）

瀬戸内離島物語（社会評論社）
DAYS JAPAN（2015. 11　Vol. 12）

このうち、「ガス弾の谷間からの報告」および「日本の戦後を考える戦後の若者」については容量 1 kb。

- フォルダ 3　戦後70年特別企画　アーサー・ビナード「探しています」
  20160915_j_ba.or.jp
  20160916　戦後70年特別企画アーサー・ビナード「探しています」
  Sagasu_pod-004-15
  Sagasu_pod-054-16
- フォルダ 4　Audio
  第25回憲法フェスティバル～憲法にカンパイ！～記念曲「誓い」
  20111026_3.11珀年の孤独
  福島菊次郎－写らなかった戦後音訳版 CD シリーズセット版
  20060300菊次郎の海　徳山図書館からのカセットテープ
  福島菊次郎トーク（シンフォニア）
  20150425_ 戦後70年特別企画アーサー・ビナード
  20160419_OA 番組「ひとみのひとりごと」福島菊次郎
  MP 3 形式サウンド
- フォルダ 5　Documents
  1 点物のデータ　419点
  内容は福島菊次郎に関連する新聞・雑誌記事
- フォルダ 6　Documents-unpbulished data
  2011年以降のワープロ文書
  手紙・日記・記録・ノート
  福島さんが B 4 サイズの用紙にまとめた資料
  1 点物のデータ　50点
- フォルダ 7　Photo
  132フォルダを格納
- フォルダ 8　Video（91本）

On Official Video　35項目（16本）
On TV　105項目（52本）ニュース映像含む
On Unofficial Video　18項目（18本）
On Web　15項目（15本）

• フォルダ 9　国立国会図書館デジタルデータ
国立国会図書館デジタルコレクション
http://dl.ndl.go.jp/
「福島菊次郎」で全検索　2016/09
条件　インターネット公開：なし
図書館送信資料及び　国立国会図書館内限定：143件

（付記）

本稿は2018年度恵泉女学園大学研究助成報告書「福島菊次郎個人アーカイブズの構築と資料活用に向けて―体制整備と基礎調査：写真パネルおよび遺品整理を中心に―」（代表　高橋 清貴）を加筆、修正したものである。

謝辞

旧蔵図書の資料化にあたっては恵泉女学園大学図書館の協力を得た。また写真資料の整理にあたっては保存会の皆様ほか、花と平和のミュージアムの協力があった。記してお礼を申し上げる。

注

1）山口県下松市出身。第２次世界大戦に従軍し宮崎県で敗戦を迎える。戦後アマチュアカメラマンとして作品を発表、60年代からプロの報道写真家として数多くの作品を残した。1960年『ピカドン　ある原爆被爆者の記録』で日本写真批評家協会賞特別賞。原爆、政治･軍事問題、学生運動、公害･福祉問題などをライフワークとし、写真集12冊（2011年自費出版の『鶴のくる村』は第14回日本自費出版文化賞特別賞受賞）を発表。総合雑誌、グラビア誌『朝日ジャーナル』、『文藝春秋』などに発表された作品は3300点に及ぶ。

2）恵泉女学園80周年記念事業の一環として、2014年ネットワーク型ミュージアムとして開館。コア施設を恵泉女学園大学南野キャンパスに置いた。

3）高橋清貴（2018）「福島菊次郎とは誰だったのか～写真と遺品から見える人柄」『「花と平和のミュージアム」ニュースレター』花と平和のミュージアム5,2.

4）2019年４月広島平和記念資料館本館のリニューアルオープンに際し、福島氏の作品が「N家の崩壊」として展示された。福島氏の再評価として特筆すべきであろう。（参照）広島平和記念資料館 H.P.3- 2 - 6「N家の崩壊」
https://hpmmuseum.jp/modules/exhibition/index.php?action=ItemView&item_id=98&lang=jpn

5）福島氏は1999年賛同者と共に下関市安岡町に「写真資料館」を開設。１年後の2000年８月に柳井市駅前に移転し「福島菊次郎写真美術館」と改称。「戦後の日本を考える」資料として写真パネル（20テーマ）と写真を収蔵。常設展示のほか、写真の貸し出し、関連資料の展示、新しい写真家の作品の展示・収蔵なども行うとした。

6）青山英幸（2002）『記録から記録史料へ　アーカイバル・コントロール論序説』pp.　25-27

【参考文献】

青山英幸（2002）:『記録から記録史料へ　アーカイバル・コントロール論序説』岩田書院 .

飯沢耕太郎（1999）:『日本写真史を歩く』ちくま学芸文庫 .

伊藤俊治（1992）:『20世紀写真史』ちくま学芸文庫 .

上村英明（2019）:「恵泉女学園　『花と平和のミュージアム』アート保存事業」『多摩ニュータウン研究』No.21 pp. 144-147

大竹昭子（1994）:『眼の狩人　戦後写真家たちが描いた軌跡』新潮社 .

大原一興（1999）:『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会 .

管真城（2013）:「資料の『収集』ということ」『大学アーカイブズの世界』pp.47-49大阪大学出版会 .

国文学研究資料館史料館（編）君塚仁彦（2003）:「アーカイブズと博物館・博物館学」『アーカイブズの科学・上』pp.245-261柏書房 .

徳山喜男（2005）:『原爆と写真』御茶の水書房 .

那須恵子（2013）:『My Private Fukushima 報道写真家福島菊次郎とゆく』みずのわ出版 .

福島菊次郎（2013）:『証言と遺言』デイズジャパン .

藤原聡（2016）:『戦後史の決定的瞬間　写真家が見た激動の時代』ちくま新書 .

【資料】

ロングインタビュー「福島菊次郎の軌跡」『写真年鑑2011』日本カメラ社 .

【参考映像】

長谷川三郎監督（2012）:「ニッポンの嘘　報道写真家 福島菊次郎90歳」 2012「ニッポンの嘘　報道写真家 福島菊次郎90歳」制作委員会 .

添付資料

1．福島菊次郎全写真展解説
2．旧蔵書籍一覧
3．旧蔵写真リスト
4．年表

1．福島菊次郎全写真展解説

福島菊次郎展 TAMA 実行委員会作成

福島菊次郎全写真展

この写真展は、報道写真家、福島菊次郎さん（1921年山口県下松市生まれ）の写真を展示したもので、下記の15テーマ（左側）に渡っている。369枚のパネルに、およそ2000点ほどの写真が展示されている。テーマ番号に重なりがあったり、著作での記述（右側）とズレがあるのは、早くできたテーマから展示を進めながら他のテーマを制作した、長期にわたる１人での手作りゆえの混乱があるのかもしれない。福島さん本人の構想においては、計23テーマ（うち３テーマが未完）であるが、20テーマのうち５テーマのパネルは行方が分からない（右側の下線の引いてあるテーマ）。

福島菊次郎遺作展「日本の戦後を考える」（今回展示しているもの）	『映像で見る日本の戦後』20テーマ（『写らなかった戦後　ヒロシマの嘘』記載分）
1．原爆と人間の記録（28枚）	1．原爆と人間の記録
2．ピカドン（24枚）	2．ある被爆者の記録（ピカドン）
欠番	<u>3．捨てられた子どもたち</u>
欠番	4．自衛隊と兵器産業
欠番	5．捨てられた日本人
6．捨てられた日本人（22枚）	6．学生運動の軌跡
7．自衛隊と兵器産業（24枚）	7．女たちの戦後
8．全共闘運動（学生運動）の軌跡（28枚）	8．ふうてん賛歌
9．女たちの戦後（23枚）	9．三里塚からの報告
10．ふうてん賛歌（22枚）	10．公害日本列島
11．三里塚からの報告（27枚）	11．瀬戸内離島物語

12. 自然と人間破壊の構造―公害日本列島（29枚）	12. 原発がくる
13. 瀬戸内離島物語（30枚）	13. 鶴の来る村
14. 原発が来た（22枚）	14. 写真で見る戦争責任
15. 鶴のくる村（22枚）	15. 日本バンザイ
16. 写真で見る戦争責任（28枚）	16. ある戦後（宮渕紗枝子撮影）
欠番	17. 沖縄、死の洞窟
欠番	18. 福祉国家沈没
19. 天皇の親衛隊（28枚）	19. 天皇の親衛隊
19. ある老後（20枚）撮影：宮渕紗枝子	20. 警察国家復活
	撮影、校正済みの未完作品
	1．ベ平連活動の軌跡
	2．プラスマイナス100度の旅
	3．しあわせの詩

各テーマの展示は何度となく行われてきたが、この大量の自作パネルを一堂に会して展示するのは、今回が初めてである。それをもって「全写真展」と銘打ったもので、20万枚を超すであろう福島さんの写真のすべてではないが、報道写真家、福島菊次郎さんが世に問うてきたもののうち、今出せる形であるもの「全て」を集めたと理解していただければと思う。（※「ある老後」のみは福島さんを被写体としたものであるが、彼の仕事を理解する上で重要なテーマであり、彼自身がこのシリーズに入れたものである。）

自作パネルを市民の主催によって展示していくというスタイルは、福島さんが1989年に「戦争責任展」（テーマ16）を通して始めたものである。その時のパネルは、今回の展示会場入り口の左に展示されている横長のパネルである。その経験をもとに、より広いテーマで自身の写真を展示するこの「日本の戦後を考える」が作られたのである。

ちなみに、キャプションの内容は、当時の状況のままであり、データが新しくなったもの、事実誤認があるものなども、修正はしていない。そうした部分の補足等は、福島さんの思いを受け止める人々の今後の課題であり、今回はまず「すべてを展示」することを目的とした。

1．原爆と人間の記録

1945年末までに原子爆弾によって亡くなった人数は、広島で約14万人、長崎で約７万人と推計されている。生き残った人も、ケロイドや様々な疾患に苦しみ、放射能の影響が生まれてくる子どもに障がいをもたらさないかと恐れた。

それに加えて多くの被爆者は家族を失い、健康を害し、長い間公的な支援もなく、貧困にあえいだ。そうした人たちの多くが集まった基町（原爆スラム）は、「平和都市ヒロシマの恥部」と呼ばれ、そこに住む人たちは露骨な差別を受けた。基町には被爆した朝鮮人も多く暮らしたが、戦後の日本社会はそのことの意味を長い間問わずにきた。

米国が民間機関だと言って広島と長崎に設立したABCC（原爆傷害調査委員会）は、国防総省直属の軍事機関で、被爆者10万人を強制的に調査したが、治療は一切せず、核兵器の開発にそのデータを使った。公的支援は、1957年の原爆医療法まで待たなければならなかったが､厚生大臣（現在は厚労大臣）に被爆者として認定されなければ支援は受けられず、認定基準をめぐって裁判が繰り返されてきた。

戦後、「平和都市」とイメージづけられたヒロシマ・ナガサキが、多くの被爆者を見殺しにしてきたことを写しだそうとしたのが、この記録だと言える。

2．ピカドン

広島市江波（えば）で漁師をしていた中村杉松さんは、建物疎開（火災延焼を防ぐための建物の取り壊し）に動員され、爆心地から約1.6kmの地点で被爆した。妻が1951年に亡くなり、６人の子どもを抱えながらも病気でまともに働けない中村さんの苦しみと、その家族の貧困の状況を、十年以上にわたって追ったのがこの記録である。

そのあまりに貧しい暮らしにシャッターが切れなかった福島さんが、それでも中村さんの家に長く通っている中である日、「わしの写真を撮って皆に見てもろうてくれ。ピカに遭うた者がどんなに苦しんでいるかわかってもろうたら成仏できる。頼みます」と言われ、その日からこの写真を撮り始めたという。

中村さん一家を撮った福島さん初めての写真集『ピカドン』は、1961年に発売され、それを見届けるように中村さんは亡くなった。『ピカドン』は、日本写真批評家協会賞特別賞を受けた。報道写真家福島菊次郎は、こうして誕生した。

6．捨てられた日本人

1945年に終わったアジア・太平洋戦争の敗戦時点、日本軍には約720万人の兵士がいて、そのうち外地（中国など各地の戦場のほか、植民地や「満州国」、東南アジアの占領地など）に約350万人がいた。外地在住の民間人も約300万人いた。この戦争がアジア諸地域への侵略だったからだ。

「満州」では、戦後の日本と中華人民共和国の国交断絶状態によって、現地に取り残された日本人が多数いた。帰国事業の開始後も、特に日本語を話せない残留孤児は身元の判明が難しく、本格的な調査はようやく1975年から始まり、帰国後もことばの壁や差別に苦しんだ。

戦時中、「国策の花嫁」として朝鮮人と結婚した日本人女性の多くが、朝鮮戦争で夫や子どもを失い、孤立の中で暮らしていた。1981年から帰国事業が始まったが、故郷の人たちは彼女たちを受けいれず、苦しい生活を強いられた。

戦争のために日本政府に動員された人の中には、多くの朝鮮人・台湾人がいた。戦時中は彼らも「日本人」だったからだ。植民地化で勝手に日本人にされ、戦争に動員され、敗戦後、本人の意思と関係なく日本人から外されることで、日本国籍を持っていれば受けられた被害補償を受けられなかった人は、多数いた。

これは戦争によって日本から「切り捨てられた」人たちの記録である。

7．自衛隊と兵器産業

憲法９条で軍隊を持たないとしながら、戦後日本は再軍備を進め、1967～71年度の第３次防衛力整備計画（３次防）は、当初計画の５年総額で約２兆3400億円（１年平均4680億円）の予算をつぎ込むものとなった。

この時期、まだ広く名前を知られていなかった福島さんは、防衛庁（当時）にかけあって、兵器産業の工場や、自衛隊の軍事ショーを約３年にわたり取材することに成功した。特に兵器工場は軍事機密の塊である。自衛隊の主要

な兵器は、米国企業とのライセンス生産といって、米企業の持つ技術を、契約によって使わせてもらうものが中心なのでガードが固い。取材の際、彼は撮影禁止のところも“正確な知識を得るため”と案内してもらい、盗撮。違憲の存在であるはずの兵器工場の現実を世に問うた。

米軍との共同演習が当たり前となった21世紀の自衛隊と比較すれば、当時の軍事ショーは「戦争ごっこ」ていどだったと福島さんは書いている。ちなみに現在の中期防衛力整備計画（2014～18年度）の５年総額は、24兆6700億円（１年平均４兆9340億円）となっている。

８．全共闘運動（学生運動）の軌跡

1960年代後半、アメリカの北ベトナム爆撃が開始され、全世界でベトナム反戦闘争が高揚した。反戦闘争と同時に、大学の学費値上げ、学生会館・寮の自治破壊などに対して＜異議申し立て＞を行い、自治会の枠を超えた全共闘運動が開始された。

東大では医学部のインターン登録医反対闘争から東大全共闘が結成された。日大では大学の使途不明金追及で全学に広がり、日大全共闘が結成され、全共闘運動は全国大学に広がった。政府は学生反乱を暴力的に抑え込み、1969年１月19日には学生が占拠する東大安田講堂を放水、催涙ガスなどで包囲し制圧した。

学生の反乱は、ベトナム反戦闘争や70年安保闘争と結合し、学内から街頭に進出し、機動隊の暴力と激しく対立した。一部は武装をエスカレートさせ、激しい内部対立と国家暴力との対立の中で、あさま山荘で戦った連合赤軍のように自壊していき、学生運動の長い停滞期に入るのである。

福島さんは、学生の側に立ちカメラを向けることによって国家の暴力と、闘争の中の青春を映しだしていった。学生運動に共感したのは、青年時代に、軍国主義をうのみにして、疑うことも反対することもできなかった福島さん自身への痛烈な告発でもあった。

９．女たちの戦後

婦人参政権が認められた1946年戦後最初の総選挙で市川房江、神近市子など39人の女性が当選し、女たちの戦後が始まったといわれる。しかし男女平等、男女同権はいくつかの制度的変更はあったもの、＜性の自立＞にはほど

遠かった。それは、一人一人の自立を求め、組織と既成概念に反逆して、戦争反対、安保反対、学生自治の確立を要求した学生運動、全共闘運動でも同じであった。60年代学生運動は、まさに男の世界の運動であった。

1970年、こうした学生運動が独善的であり、民族差別にも無自覚であるとして、華青闘（華僑青年闘争委員会）から告発されることに端を発したかのように、部落差別、アイヌ、沖縄、障害者差別、そして女性差別が問われ、女たちの戦後の一大革命が起きたのである。それは貞操という概念からの解放、性の解放であった。性と生はイコールで結ばれ、フリーセックスという言葉が生まれ、女からの解放が主張された。それは「私を見て！」という自己肯定の運動でもあり、田中美津さんたちの「グループ闘う女」を先頭に全国に広がり、ウーマンリブ、フェミニズム、ジェンダーの問題として現在に続いている。

10. ふうてん賛歌

「ふうてん」は「ヒッピー」の日本的表現である。

1960年代のアメリカにおいて、ベトナム戦争の中、アメリカ文化と生活を謳歌していた中産階級に対し、彼らを「スクエアー（くそまじめ）」と呼び、自由と愛を中心としたカウンターカルチャー（対抗文化）を提起し実践した若者たちをヒッピーと称した。髪を伸ばしひげを伸ばして、既成のスクエアーなアメリカ社会を拒否した。音楽、絵画、詩、映像などで自己表現し、時にはサイケデリックな幻覚を肯定し、マリファナなどの薬物を使用した。

日本では1967年ごろから新宿を中心にふーてん族として登場し、風月堂などの新宿文化人から新宿東口野宿族まで、ハプニングやペンティングなど独特な文化空間を創っていった。一部では、インドのヨガなどの影響をうけ、自然と同化するとして「～族」を名乗り共同生活を営んでいった。

1970年代には全世界的な反戦運動の後退や学生運動の過激化の中で、ヒッピー運動は後退した。しかし、「愛」と自由と自然というその思想は、戦争反対とエコロジー、反原発など現在に通じている。軍国主義一色の福島さんの青年時代になかった、自由で多様な若者文化に関心を持ってシャッターを押したのだろう。

11. 三里塚からの報告

1966年、佐藤内閣は農村地帯である成田市三里塚と芝山町に、住民や農民たちに何の事前説明もなく新東京国際空港（現・成田国際空港）建設を閣議決定した。この地に入植し開拓してきた地元農民を中心にすぐに反対闘争が組織され、三里塚・芝山連合空港反対同盟が結成され、長く、困難な戦いを開始した。当時のベトナム反戦闘争とも連動し、全国の学生、青年労働者も支援に入り、団結小屋に寝泊まりし、激しい反対闘争を展開した。住民無視、農民切り捨てであり、日本の経済的、軍事的海外進出拠点としての空港建設反対闘争は、少年、青年、老人、婦人それぞれの行動隊を組織し、地域ぐるみの抵抗運動を行った。

地域の歴史も地域の住民も無視して一方的に空港建設を決定し、国家権力を持って、全国の機動隊を動員し暴力的に農民たちの抵抗運動を圧殺した＜三里塚闘争＞は、強大なアメリカ軍と戦っているベトナム人民の戦いと二重写しとなって、全国、全世界で注目された。三里塚農民を中心とした抵抗運動は1973年開港予定を大幅に遅らせ、1978年１本の滑走路だけで開港し、現在に至るも同地で耕す農民の前で完全開港に至っていない。

住民の反対運動を圧殺し、結果として住民を切り捨て、土地を荒廃させるのは、原発再稼働や公共事業の強行に通じることである。

12. 自然と人間破壊の構造―公害日本列島

明治時代、富国強兵のための工場や施設が建設され始め、その排水や廃棄物が周辺の自然を破壊していった。今では有名な足尾銅山の鉱毒事件だが、発生当時見向きもされなかった。戦後の公害事件の多発後、その意味が問い直されるようになった。

敗戦後、軍事大国の道から経済大国への道へと舵を切ることで、日本各地で公害が発生した。最も有名な公害病である水俣病は、熊本県水俣市のチッソ水俣工場が排出したメチル水銀を原因とし、1956年５月１日に被害が公式確認された。主に脳、神経系にダメージを与え、まひ、視野狭窄、運動障害などの症状が起き、多数の死者が出た。1959年に厚生省は、主因が有機（メチル）水銀であるとしたものの、当時チッソの排水は止まることなく、1968年までメチル水銀は流され続けた。人命よりも企業の利益が優先されたので

ある。

コンビナートや大工場が並ぶ瀬戸内海も、汚染によって魚の奇形が多発した。福島さんは水俣ほか全国各地の公害の現場を取材しているが、特に海が破壊される前から、汚染されていくプロセスを撮り続けてきた瀬戸内海の記録は、彼にしか撮れなかった貴重なドキュメントである。

13. 瀬戸内離島物語

瀬戸内海の漁村で育った福島さんにとって、瀬戸内の離島は、故郷の姿そのものである。夫や息子が戦死して遺された遺族、貧しい家の仕事を手伝いつつ、遊び盛りで元気いっぱいの子どもたちなど、豊かな、しかし時に厳しい自然の中で生きる人々の生活の姿が写しだされている。

しかし高度経済成長の時期になると、若者は都市部へと移り住んでいく。今日再び大きな問題となっている過疎化と高齢化の進行は、70年代から今日に至るまでこの地域ではずっと続いていることである。海の汚染も重なり、離島の豊かな暮らしは、そこに息づいていた文化とともに失われつつある。これは経済優先主義と消費文化によって失われたものの記録であるとも言えるだろう。

瀬戸内海の漁村で生まれ育った福島さんにしか撮れなかった、「山口県周防灘から伊予灘を経て安芸灘にいたる100キロの波間に浮かぶ島々の40年に渡る戦後史」である。

14. 鶴のくる村

古くから日本各地で親しまれてきた鶴であるが、明治以後の乱獲で一気に減少した。山口県の八代村（現・周南市）は、本州唯一の越冬地である。八代の鶴は頭部が赤い丹頂鶴ではなく、身体が灰色（淡いシルバーグレー）の「ナベ鶴」（ナベヅル）である。ナベヅルは全長100㎝ていど、日本に来る鶴のうち最少のものである。シベリアなどの繁殖地が凍結する晩秋、朝鮮半島経由で飛来する。日本ではほかに鹿児島県の出水平野が越冬地として知られる。

特別天然記念物に指定された1950年代には八代に300羽以上飛来していたが、1997年には20羽、2013年度にはわずか10羽しか飛来していない。もちろん人間による生態系の破壊が主原因である。

福島さんはアマチュア時代の1953年からの４年間、八代村の鶴を撮影した。冬の寒い中、きわめて用心深い鶴を、当時の撮影機材で撮影するのは大変だったようだ。

15. 原発が来た

瀬戸内海の周防灘に浮かぶ、山口県上関町の祝島（いわいしま）は、穏やかな海の多い瀬戸内海にあって、荒波と暴風にさらされ、家を守るために石垣が積み重なった、厳しい孤島だった。福島さんの生まれた下松の沖合から見えるこの島を、福島さんは約50年にわたって撮り続けてきた。

1982年、この島に向き合い、わずか４㎞しか離れていない同じ上関町の田ノ浦に、中国電力の上関原発の建設計画が浮上した。以来、今日に至るまで30年以上にわたって、この島では粘り強い住民の反対運動が続いている。この島の住民の多くは有機農業や伝統的な漁法などによって、自然とともに生きてきた。原発建設賛成による漁協への補償金をあてにするよりも、自分たちの生活の基盤となる海を守ることを、彼らは決意したのだ。今でこそ祝島の原発反対運動は一部で知られているが、建設計画前から長期にわたるこの写真は、貴重な記録である。

16. 天皇の戦争責任

「戦後の日本の最初の過ちは、『敗戦』を『終戦』と詐称し、天皇の戦争責任を免責したことである」と、福島さんは、『写らなかった戦後３　殺すな、殺されるな』（現代人文社）の本文を始めている。

1921年に山口県で生まれた福島さんは、召集されて1945年春に広島市の部隊に配属された。米軍が上陸してきたら、爆雷を抱えて戦車に飛び込んで死ぬという特攻要員として宮崎へ移動したのは、原爆投下のわずか６日前であった。

1988年、昭和天皇の下血（肛門から血が出ること、通常は血便として出る）の報道が毎日のようにテレビで出され、国家元首として戦争を戦った昭和天皇の責任を問わぬままに来た戦後日本への怒りと危機意識から、当時病床にあった福島さんは、自分の写真を通してこの問題を世に問う、この「戦争責任展」を開催することを決意した。

福島さん手作りの写真パネルによるこの展示は、右翼の妨害などにあいな

がらも、市民など有志の主催によって、1990年５月から全国各地で３年間162か所で開催され、約10万人が訪れた。ここで展示されている28枚は、それを再構成したものである。

19. 天皇の親衛隊

1970年11月、当時を代表する作家のひとりであった三島由紀夫が、自衛隊の蜂起を訴え割腹自殺したニュースは、世界に衝撃を与えた。天皇に殉ずるという敗戦以前の価値観を、世間に引っ張り出したといえるだろう。

1976年、昭和天皇の在位50周年を祝賀する行事が、銀座通りを終日通行止めにして行われた。元号（昭和、平成など）を使い、日の丸を掲げ、君が代を歌う、といったことを「当然」とすることで、天皇の威信を高める雰囲気と、警察の力を強化して、従わない者に圧力をかける体制が、着々と作られてきた。

福島さんは、かつて天皇を頂点（大元帥）とする軍隊の下で、一兵卒として人々の命があまりに軽く扱われてきたことを目の当たりにしてきた。その責任者である昭和天皇の責任が、戦後ほとんど問われないまま放置されてきたことに対する問題意識が、彼の活動を貫いてきたと言える。

19. ある老後（撮影：宮渕紗枝子）

1970年代、報道写真家にとって晴れの舞台ともいえる総合雑誌のグラビアページに、福島さんは毎年150頁ほど写真を掲載して活躍していた。しかし1980年代、世の中の保守化とともに、反権力の写真家の活動の場が狭まっていく。日本という国への絶望とともに、その国家と絶縁して独力で生きていこうと、福島さんは1982年、山口県の周防大島に近い無人島、片山島（片島）へ移住することを決意した。

健康を損ねたことなどもあり、結局２年で無人島を後にしたが、その後もしばらく別の島で自給自足的な生活を続けた。その際の様々な苦労は『写らなかった戦後２　菊次郎の海』（現代人文社）に詳しく書いてあるが、瀬戸内の海を愛する福島さんにとって、充実した時間であったという。

この写真は、プロの写真家を目指して福島さんに写真を学んだ宮渕紗枝子さんが、福島さんの島での生活を撮影したものである。

2．旧蔵書籍一覧

請求番号	タイトル	著者	発行社	発行年
016.2/S	図書館の誕生―ドキュメント日野市立図書館の20年	関千枝子	日本図書館協会	1986/05
023/J	自費出版年鑑2011	日本自費出版ネットワーク	サンライズ出版	2011
023/J/2012	自費出版年鑑〈2012〉第15回日本自費出版文化賞全作品	サンライズ出版（編集），日本自費出版ネットワーク	サンライズ出版	2012/11
049.1/U	読むクスリ―人間関係のストレス解消に（文春文庫）	上前淳一郎	文藝春秋	1987/07
049.1/U/10	読むクスリ〈PART10〉（文春文庫）	上前淳一郎	文藝春秋	1992/02
049.1/U/11	読むクスリ（11）（文春文庫）	上前淳一郎	文藝春秋	1992/06
049.1/U/12	読むクスリ〈12〉（文春文庫）	上前淳一郎	文藝春秋	1992/12
049.1/U/2	読むクスリ〈PART２〉（文春文庫）	上前淳一郎	文藝春秋	1988/06
049.1/U/22	読むクスリ（22）（文春文庫）	上前淳一郎	文藝春秋	1997/12
049.1/U/25	読むクスリ―人間関係のストレス解消に〈25〉（文春文庫）	上前淳一郎	文藝春秋	1999/06
049.1/U/27	読むクスリ〈27〉―人間関係のストレス解消に（文春文庫）	上前淳一郎	文藝春秋	2000/06
049.1/U/3	読むクスリ〈PART３〉（文春文庫）	上前淳一郎	文藝春秋	1989/01
051./Y	編集者からの手紙―『週刊金曜日』と８年	山中登志子	現代人文社	2001/12
051/D/1	団塊パンチ（１）		飛鳥新社	2006/04
051/D/2	団塊パンチ（２）		飛鳥新社	2006/07
070.2/A	新聞と戦争	朝日新聞「新聞と戦争」取材班	朝日新聞出版	2008/06
070/J	Journalism 280 特集 フォトジャーナリズムの現在		朝日新聞社	2013/09
070/K	写真と権力　報道の自由・吉岡カメラマンを守る会議	甲斐良一	アディン書房	1975
070/M	マスコミの内側「現代の眼」編集長が語る	丸山実	幸洋出版	1980
070/N	フォト・ジャーナリストの眼（岩波新書）	長倉洋海	岩波書店	1992/04
114.2/I	うらやましい死にかた（文春文庫）	五木寛之	文藝春秋	2002/08
114.2/Y	死の壁（新潮新書）	養老孟司	新潮社	2004/04
134.9/N	ツァラツゥストラ	ニーチェ	中公文庫	1973

146.1/K	魂にメスはいらないユング心理学講義（講談社＋α文庫）	河合隼雄（著），谷川俊太郎（著）	講談社	1993/09
147/K	夢と神秘とタントラの謎	加藤好弘	日本文芸社	1980
147/S	エマニュエル・スウェデンボルグの霊界マンガ版―私は霊界を見てきた!!	エマニュエルスウェデンボルグ（著），Emanuel Swedenbolg（原著），今村光一（翻訳），南聖樹	中央アート出版社	2000/03
154./K	愛国の作法（朝日新書）	姜尚中（著，原著）	朝日新聞社	2006/10
159./T	愛そのものになる〈1〉	高橋弘二	SSC名古屋	1995/06
159.8/I	いのちの響 心の言葉	TBS「いのちの響」制作委員会（編集）	徳間書店	2005/04
159.8/I	いのちの響 心の言葉	TBS「いのちの響」制作委員会（編集）	徳間書店	2005/04
175.1/T	靖国問題（ちくま新書）	高橋哲哉	筑摩書房	2005/04
185.9/K	古寺巡礼京都7浄瑠璃寺	清岡卓行、佐伯快勝	淡交社	1976/01
188.7/N	原爆と寺院―ある真宗寺院の社会史	新田光子	法蔵館	2004/05
188.9/S	お笑い創価学会 信じる者は救われない―池田大作って、そんなにエライ？	佐高信（著），テリー伊藤（著）	光文社	2000/07
191.2/S	六ヶ所村―核燃基地のある村と人々	島田恵	高文研	2001/04
193./S	小型聖書DUO（緑）旧約続編つき―新共同訳文庫		日本聖書協会	2005/12
193.1/M	旧約聖書入門―光と愛を求めて	三浦綾子	小学館	1984/12
193.5/M	新約聖書入門―心の糧を求める人へ	三浦綾子	小学館	1984/11
209.7/H	ヒロシマ―進歩と殺戮の20世紀	林順治	彩流社	2005/11
209.7/N	写真集「20世紀の瞬間　紛争のない世界を子供たちへ」	共同通信社	日本ユニセフ協会	1999
210.1/N	日本の海賊　日本の歴史新書	長沼賢海	至文社	1962
210.2/D	土偶と土面　1969春の特別展	サントリー美術館	サントリー美術館	1969
210.2/K	旧石器遺跡捏造（文春新書）	河合信和	文藝春秋	2003/01
210.3/H	アマテラス誕生―日本古代史の全貌	林順治	彩流社	2006/06
210.3/H	応神＝ヤマトタケルは朝鮮人だった	林順治	河出書房新社	2009/04
210.5/K	元禄御畳奉行の日記―尾張藩士の見た浮世（中公新書（740））	神坂次郎	中央公論社	1984/09
210.6/H	漱石の時代―天皇制下の明治の精神	林順治	彩流社	2004/04
210.6/J	自由民権・東京史跡探訪	竹橋事件の真相を明らかにする会	昭和出版	1984
210.7/A	戦場体験「声」が語り継ぐ歴史（朝日文庫）	朝日新聞社（編集）	朝日新聞社	2005/07

210.7/F	天皇の軍隊と日中戦争	藤原彰	大月書店	2006/05
210.7/F	日本の戦後を考える　天皇の親衛隊	福島菊次郎	三一書房	1981
210.7/F	戦争がはじまる	福島菊次郎		1987
210.7/G	日本人と戦争（朝日文庫）	ロベールギラン（著），根本長兵衛（翻訳），天野恒雄（翻訳）	朝日新聞社	1990/12
210.7/G	忘れまい、この惨禍－原爆展	朝日新聞東京本社	朝日新聞東京本社	1982
210.7/H/2	ヒロシマナガサキ原爆写真・絵画集成（２）大型本	家永三郎	日本図書センター	1993/03
210.7/K	ザ・クロニクル　戦後日本の70年２ 1950-54 平和への試練（the Chronicle）単行本	共同通信社（編集）	幻冬舎	2014/11
210.7/K	天皇の戦争責任	加藤典洋（著），竹田青嗣（著），橋爪大三郎（著）	径書房	2000/11
210.7/K	特攻―若者たちへの鎮魂歌（レクイエム）（PHP 文庫）	神坂次郎	PHP 研究所	2006/07
210.7/K	誰も「戦後」を覚えていない（文春新書）	鴨下信一	文藝春秋	2005/10
210.7/K	南京事件論争史―日本人は史実をどう認識してきたか（平凡社新書）	笠原十九司	平凡社	2007/12
210.7/K/1	語りつぐ昭和史〈１〉（朝日文庫）	伊藤隆（著），有竹修二（著），横溝光暉（著），有末精三（著），高橋亀吉（著），片倉衷（著），鍋山貞親（著）	朝日新聞社	1990/07
210.7/K/1	太平洋戦争（上）（中公新書（84））	児島襄	中央公論新社	1965/11
210.7/K/2	語りつぐ昭和史〈２〉（朝日文庫）	加瀬俊一（著），細川護貞（著），大井篤（著），賀屋興宣（著），赤松貞雄（著），青地晨（著）	朝日新聞社	1990/08
210.7/K/2	太平洋戦争（下）（中公新書（90））	児島襄	中央公論新社	1966/01
210.7/K/3	語りつぐ昭和史〈３〉（朝日文庫）	保科善四郎（著），大和田啓気（著），三文字正平（著），西村熊雄（著），加瀬俊一（著），太田剛（著），佐藤功（著）	朝日新聞社	1990/09
210.7/M	マッカーサー元帥と昭和天皇（集英社新書（0013））	榊原夏	集英社	2000/01

210.7/M	南京戦閉ざされた記憶を尋ねて―元兵士102人の証言（英語）	松岡環	社会評論社	2002/08
210.7/N	日本の一日―昭和から平成へ1989年１月７日～８日全記録大型本	Days Japan（編集）	講談社	1989/02
210.7/N	敗戦真相記―予告されていた平成日本の没落	永野護	バジリコ	2002/07
210.7/N	長崎市長への7300通の手紙	原田奈翁雄	径書房	1989
210.7/O	日本のいちばん醜い日	鬼塚英昭	成甲書房	2007/07
210.7/O	原爆の秘密（国外編）殺人兵器と狂気の錬金術	鬼塚英昭	成甲書房	2008/07
210.7/O	原爆の秘密（国内編）昭和天皇は知っていた	鬼塚英昭	成甲書房	2008/07
210.7/O	張作霖爆殺―昭和天皇の統帥（中公新書）	大江志乃夫	中央公論社	1989/10
210.7/S	週間朝日が報じた昭和の大事件85周年記念増刊2007年３月３日増刊号ムック	朝日新聞社（編集）	朝日新聞社	2007/03
210.7/S	もう、神風は吹かない	シュミット村木眞寿美	河出書房新社	2005/07
210.7/S/2	戦後日本スタディーズ２	岩崎稔（編集），上野千鶴子（編集），北田暁大（編集），小森陽一（編集），成田龍一（編集）	紀伊國屋書店	2009/05
210.7/S/5	証言･清算されていない朝鮮支配（アジアの声）	戦争犠牲者を心に刻む会（編集）	東方出版	1991/08
210.7/T	戦争案内―ぼくは20歳だった―	戸井昌造	晶文社	1986/07
210.7/T	雑貨屋通い	新井和子	未来社	1992/12
210.7/T	人間魚雷―特攻兵器「回天」と若人たち	鳥巣建之助	新潮社	1983/10
210.75/Z	ヒロシマ広島	広島デー実行委員会	広島デー実行委員会	
210.76/I	写真・松川事件	伊藤昭一	東京中日新聞	1961
213.6/N	武蔵の山河に生きた人びと	野村正太郎	昭和出版	1985
217.6/A	百二十八枚の広島	明田弘司	南々社	2009/08
219.9/I	沖縄返還―1972年前後	池宮城晃池宮城拓	池宮商会	1998/02
221./K	朝鮮史（講談社現代新書460新書東洋史10）	梶村秀樹	講談社	1977/10
221/C/1	朝鮮問題叢書・１　大村収容所	林正功	京都大学出版会	1969
221/K	朝鮮―民族・歴史・文化―	金達寿（キム・タルス）	岩波新書	1958

222.2/O	上海1930年（岩波新書）	尾崎秀樹	岩波書店	1989/12
223.1/T	たたかうベトナム　上冊	「ノーボチス」出版社	刀江書院	1966
223.5/I	遥かなり　わがアンコールワット	一之瀬泰造	一之瀬泰造写真集刊行委員会	1981
223.5/M	わたしが見たポル・ポト―キリングフィールズを駆けぬけた青春	馬渕直城	集英社	2006/09
223.5/N	NHK スペシャル 激動の河・メコン―戦火消えぬ村・帰ってきた兵士たち	NHK 取材班（著）	日本放送出版協会	1989/12
223.9/N	日本軍占領下のシンガポール―華人虐殺事件の証明	許雲樵（編集），蔡史君（編集），田中宏（翻訳），福永平和（翻訳）	青木書店	1986/08
223/S	フォト・アピール 難民国境の愛と死	酒井淑夫	図書刊行会	1980
224.8/Y	ネグロス 嘆きの島〔フィリピンの縮図〕	山本宗輔	第三書館	1991
236/S	スペイン戦争	斉藤孝	中央公論社	1966
240/M	森と精霊と戦士たち	アフリカ行動委員会	アフリカ行動委員会	1976
253/J	Civil War Battle fields Then & Now（Then and Now Series）（英語）ハードカバー	Jr. Campi James（著）	Thunder Bay Pr	2002/10
280.4/Y/2	人間臨終図巻〈２〉	山田風太郎	徳間書店	1996/11
280.4/Y/3	人間臨終図巻〈３〉（徳間文庫）	山田風太郎	徳間書店	2001/05
280.4/Y/3	人間臨終図巻〈３〉	山田風太郎	徳間書店	1996/12
281./A	人、旅に暮らす（新潮文庫）	足立倫行	新潮社	1987/05
281./A	人、夢に暮らす（新潮文庫）	足立倫行	新潮社	1990/06
281./M	彼岸花―魅力ある男たちへの鎮魂歌	松本慶子	青娥書房	1989/10
282.1/A	流民列伝 風の中の旅人たち	朝倉俊博	白川書院	1977
288.4/T	新天皇系譜の研究－万世一系の演出と実態	角田三郎	オリジン出版	1980
288.4/T/1	昭和天皇（上）	ハーバート・ビックス（著），吉田裕（翻訳）	講談社	2002/07
288.4/T/2	昭和天皇（下）	ハーバート・ビックス（著），吉田裕（翻訳）	講談社	2002/11
288.4/U/1	昭和天皇最後の側近 卜部亮吾侍従日記 第１巻 昭和45年～59年	御厨貴 / 岩井克己（著），御厨貴；岩井克己（監修，監修）	朝日新聞社	2007/09

289.1/A	フィラデルフィアの野口英世	浅倉稔生	三修社	1987/10
289.1/H	我、拗ね者として生涯を閉ず 単行本	本田靖春	講談社	2005/02
289.1/H	天皇象徴の日本と“私”1940-2009	林順治	彩流社	2009/12
289.1/K	伊藤証信とその周辺	柏木隆法	不二出版	1986
289.1/K	医の時代高松凌雲の生涯	木本至	マルジュ社	1980
289.1/K	冬の雑草	郡山吉江	現代書館	1980
289.1/K	大逆事件と内山愚童	柏木隆法	JCA 出版	1979
289.1/M	抵抗の証―私は人形じゃない	三井絹子	「三井絹子60年のあゆみ」編集委員会ライフステーションワンステップかたつむり	2006/05
289.1/M	遺稿　森恒夫	森恒夫	査証編集委員会	1973
289.1/O	道ひとすじに	岡まさはる	「道ひとすじに」刊行委員会	1975
289.1/S	宮本常一という世界	佐田尾信作	みずのわ出版	2004/02
289.1/S	りんごの木の下であなたを産もうと決めた	重信房子	幻冬舎	2001/04
289.1/U	うずまく志　佐藤文明追悼文集	佐藤文明追悼文集編集委員会	佐藤文明追悼文集編集委員会	2012
289.1/W	亘理あき遺稿集・追悼集・豆の木からのたより総集編	豆の木がっこう	豆の木がっこうを育てる会	1990
289.2/J	徐兄弟　獄中からの手紙	徐京植（ソ・キョンシク）	岩波新書	1981
289.2/K	在日	姜尚中	講談社	2004/03
289.2/S	一葉便り　往復書簡集　日本人にとっての朝鮮人問題とは何か	宋斗会・青柳敦子	草風館	1987
290.9/K	旅嫌い	草森紳一	マルジュ社	1982
291.7/F	瀬戸内離島物語	福島菊次郎	社会評論社	1989
291/F/1	風土記日本　第一巻　九州・沖縄篇	下中邦彦	平凡社	1960
291/F/2	風土記日本　第二巻　中国・四国篇	下中邦彦	平凡社	1960
291/G	現代日本分県地図	人文社	全教図	1981
291/M	日本の離島	宮本常一	未来社	1960
291/N/5	日本に生きる　5　四国編	宮本常一	国土社	1975
292.3/D	泥と炎のインドシナ　毎日新聞特派員団の現地報告	大森実	毎日新聞社	1965

292.5/I	木綿のサーリー　インド幻視行	河野玄	あらき書店	1982
293.8/S	モスクワの顔	芹川嘉久子	中央公論社	1979
293.8/S	モスクワの顔	芹川嘉久子	中央公論社	1969
294.2/S	エジプトの招き	末広恭雄	角川新書	1963
295.3/H	North Carolina Impressions（Impressions（Farcountry Press））（英語）	Jim Hargan（写真），Laurence Parent（写真）	Farcountry Pr	2005/11
295.3/H	Raleigh, Durham, Chapel Hill: A Photographic Portrait（英語）	Ed Morgan（写真）	Twin Lights Pub	2006/11
295.3/H	アメリカとアメリカ人	浜田容子	実日新書	1964
295.3/H/1	星野道夫著作集〈1〉アラスカ・光と風他	星野道夫	新潮社	2003/04
295.3/H/2	星野道夫著作集〈2〉	星野道夫	新潮社	2003/05
296.6/G	戒厳令下チリ潜入記―ある映画監督の冒険―	G・ガルシア・マルケス	岩波新書	1986
297.4/T	グッドバイロンゲラップ―放射能におおわれた島	豊崎博光	築地書館	1986/07
302.1/A	DIE ANDEREN JAPANER	Gerhard Hackner	indicium	
302.1/B	日本教について	イザヤ・ベンダサン	文藝春秋	1973
302.1/H	周防点描　私の「防長評論」	橋詰隆康	徳山公論社	1983
302.1/K	シンポジウム　沖縄　引き裂かれた民族の課題	木下順二・日高六郎・田港朝昭	三省堂新書	1968
302.1/S	白地も赤く百円ライター　知花昌一　新・非国民事情	下嶋哲朗	社会評論社	1989
302.2/F	パレスチナ瓦礫の中の女たち（岩波フォト・ドキュメンタリー世界の戦場から）	古居みずえ（著），広河隆一（編集）	岩波書店	2004/02
302.2/M	核に蝕まれる地球（岩波フォト・ドキュメンタリー世界の戦場から）	森住卓（著），広河隆一（編集）	岩波書店	2003/08
302.2/N	フィリピン我が祖国	長倉洋海	れんが書房新社	1986
302.2/V	北朝鮮を知りすぎた医者（Diary of a mad place）	ノルベルト・フォラツェン（著），瀬木碧（翻訳）	草思社	2001/05
302.2/Y	フィリピン最底辺を生きる（岩波フォト・ドキュメンタリー世界の戦場から）	山本宗補（著），広河隆一（編集）	岩波書店	2003/12
302.2/Y	写真集・ビルマの子供たち	山本宗補	第三書館	2003/10
304./K	リコウの壁とバカの壁新書	ローヤー木村	本の雑誌社	2004/02
304./S	だまされることの責任	佐高信（著），魚住昭（著）	高文研	2004/08
304./S	昭和が終る日	鈴木均	昭和出版	1985/12

304./S	新・言論の覚悟	鈴木邦男	創出版	2011/06
304./Y	仮面の国	柳美里	新潮社	1998/04
304./Y	バカの壁（新潮新書）	養老孟司	新潮社	2003/04
304/B	だから私は嫌われる	ビートたけし	新潮社	1991/06
304/I	時代を挑発する	いいだ・もも	仮面社	1969
304/T	21世紀への手紙	TYS テレビ山口	TYS テレビ山口	2001
309.3/K	浅間山荘事件の真実（河出文庫）	久能靖	河出書房新社	2002/04
309.3/S	新コミュニスト宣言—もうひとつの世界もうひとつの日本	いいだもも（著），仲村実（著），生田あい（著），プロジェクト未来（著）	社会批評社	2003/11
309.3/S	連合赤軍「あさま山荘」事件—実戦「危機管理」（文春文庫）	佐々淳行	文藝春秋	1999/06
309/S	討論　七十年をどうする　—反日共系革命諸派の思想と戦略—	清水多吉	田園書房	1969
309/T	死んでも「男」野村秋介のロマンと狂気	田中いずみ	KK ベストブック	1984
310.4/A	美しい国へ（文春新書）	安倍晋三	文藝春秋	2006/07
310.4/W	民衆にとって政治とは何か	和田伸一郎	人文書院	2009/07
312.1/K	日本中枢の崩壊	古賀茂明	講談社	2011/05
312.1/K	日本人はどこへ行くのか—ふたつの戦後と日本（だいわ文庫）	姜尚中	大和書房	2007/02
312.1/M	黒の機関　ブラックチェンバー	森詠	ダイヤモンド社	1977
312.1/N	沖縄問題二十年	中野好夫・新崎盛暉	岩波新書	1965
312.1/T	「田中真紀子」研究	立花隆	文藝春秋	2002/08
312.1/T	なんでやねん	辻元清美	第三書館	2002/05
312.1/T	現代の鎖国　—アジアから日本の実像が見える	卓南生　トウ・ナム・セン	めこん	1985
312.1/Y	沖縄　本土復帰の幻想	吉原公一郎	三一書房	1968
312.2/H	パレスチナ（岩波新書黄版（382））	広河隆一	岩波書店	1987/08
313.6/T	天皇制なんかいらない！	天皇制の賛美・強化に反対する共同声明運動	新地平社	1989
314.1/N	国会という所（岩波新書黄版337）	中山千夏	岩波書店	1986/04
315.1/F	伊藤律と北京・徳田機関	藤井冠次	三一書房	1980
316.1/T	徹底追及「言葉狩り」と差別	週刊文春（編集）	文藝春秋	1994/09
316.8/N	二匹の犬と自由　—アパルトヘイト下の子どもたち	南アフリカ共和国の子どもたちほか	現代企画室	1989

316.8/S	Black America: A Photographic Journey	Marcia A Smith	Sterling	2009/02
316.8/Y	ビルマの大いなる幻影―解放を求めるカレン族とスーチー民主化のゆくえ	山本宗補	社会評論社	1996/05
317.7/C	続・ザ警察対抗法　過剰警備からガサ入れまで	千代丸健二	三一書房	1988
317.7/C	我が友、ポリスマン	千代丸健二	話の特集	1979
317.7/D	弾圧との闘い　60問60答（改訂版）	日本国民救援会	日本国民救援会	1979
318.4/F	東京村デスマッチ議員奮戦記（朝日ノンフィクション）	ふくおひろし	朝日新聞社	1987/03
319.1/K	戦後日本は戦争をしてきた（角川 one テーマ21）	姜尚中（著，原著），小森陽一（著）	角川書店	2007/11
319.1/O	日本人への遺書	岡本愛彦	未来社	1978
319.1/T	歴史認識を問い直す 靖国、慰安婦、領土問題（角川 one テーマ21）新書	東郷和彦	角川書店	2013/04
319.8/B	さがしています（単行本絵本）	アーサー・ビナード（著），岡倉禎志（写真）	童心社	2012/07
319.8/F	フォトジャーナリスト13人の眼（集英社新書）	日本ビジュアルジャーナリスト協会（編集）	集英社	2005/08
319.8/H	反テロ戦争の犠牲者たち（岩波フォト・ドキュメンタリー―世界の戦場から）	広河隆一	岩波書店	2003/07
319.8/H	ヒロシマ・ナガサキからフクシマへ「核」時代を考える	黒古一夫編（著），黒古一夫（編集）	勉誠出版	2011/11
319.8/H	図録　ヒロシマを世界に	広島平和記念資料館	広島平和記念資料館	1999
319.8/H	８・15を読む・語る	日本はこれでいいのか市民連合編	第三書館	1982/08
319.8/K	核の20世紀―訴える世界のヒバクシャ大型本	平和博物館を創る会日本原水爆被害者団体協議会	平和のアトリエ	1997/10
319.8/K	この世界の片隅で	山代巴	岩波新書	1965
319.8/K/1	新・ゴーマニズム宣言 SPECIAL 戦争論	小林よしのり	幻冬舎	1998/06
319.8/M	街から反戦の声が消えるとき―立川反戦ビラ入れ弾圧事件	宗像充	樹心社	2005/01
319.8/O	沖縄返還　付・朝日新聞世論調査	朝日新聞	朝日新聞社	1968
319.8/W	自覚と平和―国家エゴイズムを超えて	和田重正（著），「自覚と平和」刊行会	くだかけ社	1987/11

320.4/C	人生トラブル解決法―いざという時、困った時どうするか（三一新書）	千代丸健二	三一書房	1992/05
320.4/M	誰も書かなかった　ケンカのしかた	増尾由太郎	三一書房	1980
322./O	処刑と拷問の世界史―どこまで人は残虐になれるのか？（にちぶん文庫）	岡田英男	日本文芸社	2000/10
323.1/A	あたらしい憲法のはなし（小さな学問の書（２））	童話屋編集部	童話屋	2001/02
323.1/H	憲法改悪反対運動入門　青年よ銃をとるな	日高六郎	オリジン出版センター	1981
323.1/I	偉大な天皇の遺産	原田奈翁雄	径書房	1989
323.1/K	国民がつくる憲法―イエスかノーか、だけではなく	五十嵐敬喜	自由国民社	2007/09
323.1/K	憲法くん出番ですよ―憲法フェスティバルの20年	憲法フェスティバル実行委員会（編集）	花伝社	2007/05
323.1/K	史録　日本国憲法（文春文庫）	児島襄	文藝春秋	1986/05
323.1/K	読む日本国憲法（GENJIN 憲法（１））	憲法を読もう会	現代人文社	2004/04
323.1/M	天皇家の財布（新潮新書）	森暢平	新潮社	2003/06
323.1/N	日本国憲法（小さな学問の書（１））文庫	童話屋編集部	童話屋	2001/02
323.1/N	日本の防衛と憲法　総合特集シリーズ15	日本評論社	日本評論社	1981
326.2/G	無実で39年獄壁をこえた愛と革命―星野文昭・暁子の闘い	星野さんをとり戻そう！全国再審連絡会議（編集）	星野さんをとり戻そう！全国再審連絡会議	2013/09
326.2/Y	やっていない俺を目撃できるか！北海道庁爆破犯人デッチ上げ事件	やっていない俺を目撃できるか！編集委員会	三一書房	1981
326.4/K	死刑囚の記録	加賀乙彦	中公新書	1980
326.4/M	ドキュメント死刑執行	村野薫	洋泉社	1995/11
326.5/N	イラスト監獄事典	野中ひろし	日本評論社	1987/07
327.8/F	白と黒のあいだ　福岡誤殺事件	古川泰龍	河出書房	1964
332.2/S	韓国の経済	隅谷三喜男	岩波新書	1976
335.5/I	三菱帝国の神話－巨大企業の現場・労働者群	今崎暁巳	労働旬報社	1977
361.4/C	日本人と韓国人	チョング・キョンモ	新人物往来社	1974
361.4/M	メディアと活性 ― What's media activism?	細谷修平（編集），メディアアクティビスト懇談会	インパクト出版会	2012/06
361.4/U	右翼テロ！	社会評論社編集部	社会評論社	1990

361.4/W	マスコミ丼（DONBURI）―えーい、どうだ！これでもマスコミに入りたいか！	早稲田マスコミ塾（著）	実務教育出版	1989/04
361.8/N	長州藩部落解放史研究	布引敏雄	三一書房	1980
365/N	「豊かさ」の生活学―新しいライフスタイルへの発想	長嶋俊介	PHP 研究所	1990/12
365/S	住民パワー入門　かよわき庶民が自衛するために	斎藤浩二・佐和慶太郎	主婦と生活社	1972
366.3/O	働いて生きる―転機を迎えた女たちの選択	大脇雅子	学陽書房	1980/01
366.6/K	倒産の中の労働運動	剣持一巳	五月社	1978
366.6/K	光文社争議団	光文社闘争を記録する会	社会評論社	1977
367.2/M	解放の光と影　おんなたちの歩んだ戦後	両沢葉子	ドメス出版	1983
367.2/N	おんなの昭和史―平和な明日を求めて（有斐閣選書）	永原和子（著），米田佐代子（著）	有斐閣	1986/03
367.2/T	かけがえのない、大したことのない私	田中美津	インパクト出版会	2005/10
367.3/T	妻の王国―家庭内“校則”に縛られる夫たち（文春文庫）	中国新聞文化部（編集）	文藝春秋	2002/09
367.6/F	日本の戦後を考える戦後の若者たち PartII リブとふうてん	福島菊次郎	三一書房	1981
367.7/Y	続・私の気ままな老いじたく―明日に向かって心をつなぐ快適生活	吉沢久子	主婦の友社	2001/04
367.7/Y	また、あした―日本列島老いの風景	山本宗補	アートン	2006/08
367.7/Y	ひとりで暮らして気楽に老いる―夫のいない自由な生き方	吉沢久子	講談社	1998/01
367.9/N	からだノート	中山千夏	ダイヤモンド社	1977
368.3/A	自殺のコスト	雨宮処凛	太田出版	2002/01
368.4/S	従軍慰安婦・慶子	千田夏光	光文社	1981
369.1/J	ドクター・ジュノーの戦い―エチオピアの毒ガスからヒロシマの原爆まで	マルセルジュノー（著），丸山幹正（翻訳）	勁草書房	1991/08
369.2/Y	否定されるいのちからの問い―脳性マヒ者として生きて横田弘対談集	横田弘（著），原田正樹（著），米津知子（著），金満里（著，原著），長谷川律子（著），立岩真也（著）	現代書館	2004/01
369.3/A	報道写真全記録2011.3.11-4.11　東日本大震災単行本	朝日新聞社（著），朝日新聞出版（著）	朝日新聞出版	2011/04

369.3/A	東日本大震災レンズが震えた世界のフォトグラファーの決定版写真集（AERA 増刊）雑誌	朝日新聞社（著），朝日新聞出版（著）	朝日新聞出版	2011/04
369.3/A	残された日本人	新井利男	径書房	1986
369.3/B	被爆韓国人	朴スボク	朝日新聞社	1975
369.3/C	朝鮮人被爆者　孫振斗裁判の記録 被爆者補償の原点	中島竜美	在韓被爆者問題市民会議	1998
369.3/C	朝鮮人被爆者　孫振斗の告発	孫振斗さんに治療と在留を全国市民の会編集委員会	たいまつ社	1978
369.3/F	ピカドン	福島菊次郎	東京中日新聞社	1961
369.3/F	原爆と人間の記録	福島菊次郎	社会評論社	1978
369.3/F/1	写らなかった戦後　ヒロシマの嘘	福島菊次郎	現代人文社	2003/07
369.3/F/2	写らなかった戦後２　菊次郎の海	福島菊次郎	現代人文社	2005/07
369.3/F/3	写らなかった戦後３　殺すな、殺されるな	福島菊次郎	現代人文社	2010/09
369.3/H	原爆供養塔　忘れられた遺骨の70年	堀川恵子	文藝春秋	2015/05
369.3/H	三陸物語	萩尾信也	毎日新聞社	2011/09
369.3/K	炎の巡礼者　ヒロシマの母　小西のぶ子遺稿集	小西のぶ子	社会評論社	1988
369.3/K	君は明日生きるか　全国被爆者青年同盟編	破防法研究会	破防法研究会	1972
369.3/O/2	生と死の記録―続・三陸物語	萩尾信也	毎日新聞社	2012/06
369.3/S	〈JVJA 写真集〉３・11メルトダウン	日本ビジュアル・ジャーナリスト協会（編集），國森康弘（写真），小林正典（写真），桃井和馬（写真），山本宗補（写真），綿井健陽（写真），権徹（写真），佐藤文則（写真），豊田直巳（写真），野田雅也（写真），古居みずえ（写真），森住卓（写真）	凱風社	2011/07
369.3/S	3.11を心に刻んで	岩波書店編集部（編集）	岩波書店	2012/03
369.3/S	ヒロシマは昔話か―原水爆の写真と記録（新潮文庫）	庄野直美（編集）	新潮社	1984/07
369.3/S	風雪に耐えて　ある中国残留孤児の記録	島本和成	自費出版	2011
369.3/T	待ちわびるハルモニたち	髙木健一	梨の木舎	1987

369.3/W	被爆55年忘れられないあの日	神奈川県原爆被災者の会	神奈川県原爆被災者の会	2000
369.3/Y	鎮魂と抗い――３・11後の人びと	山本宗補	彩流社	2012/09
369.4/A	異国の父母―中国残留孤児を育てた養父母の群像	浅野慎一（著），トウ岩（著）	岩波書店	2006/01
371.4/S	失速するよい子たち	三好邦雄	主婦の友社	1996/09
374.3/S	沖縄教職員会	関広延	三一書房	1968
375.9/N	新しい歴史教科書―市販本	西尾幹二	扶桑社	2001/06
376.3/T	私は口をきかない　―６人の夜間中学生の話―	塚原雄太	田畑書店	1976
377.9/F	ガス弾の谷間からの報告	福島菊次郎	M.P.S. 出版部	1969
377.9/F	日本の戦後を考える　戦後の若者たち　叛逆の現場検証	福島菊次郎	三一書房	1980
377.9/N	日大闘争　武器を持て！暗黒の復権を許さぬために「擬制への叛逆」を勝利せよ！	日大全学共闘会議書記局	五同産業出版部	1969
377.9/N	全学連　'70年安保と学生運動	中島誠	三一書房	1968
377.9/T	層としての学生運動―全学連創成期の思想と行動	武井昭夫	スペース伽耶	2005/06
377.9/T	東大闘争と原発事故	折原浩（著），熊本一規（著），三宅弘（著），清水靖久（著）	緑風出版	2013/08
377.9/Z	ZENGAKUREN: Japan's Revolutionary Students	Stuart Dowsey	The Ishii Press	1970
382.1/M	忘れられた日本人	宮本常一	岩波文庫	1984
382.1/S	鶴への挽歌　八代の民俗	瀬田静香	瀬田静香	1999
382.1/S	里言葉の辞典　八代の民族	瀬田静香	瀬田静香	1981
382.1/S	遊び・芸能、俚言　八代の民族	瀬田静香	瀬田静香	1981
383.8/A	たべものの地理	浅井得一	玉川大学出版部	1975
383.8/I	食物誌	石毛直道・大塚滋・篠田統	中公新書	1975
383.8/N/35	聞き書山口の食事（日本の食生活全集）	日本の食生活全集山口編集委員会（編集）	農山漁村文化協会	1989/03
384.1/M	家郷の訓	宮本常一	岩波文庫	1984
384.3/M	海と日本人	宮本常一	八坂書房	1973
384/M	よばいのあったころ　証言・周防の性風俗	向谷喜久江	マツノ書店	1986
388.1/M	周防大島昔話集	宮本常一	瀬戸内物産出版部	1985

389.1/B	菊と刀―日本文化の型（現代教養文庫 A501）	ルース・ベネディクト（著），長谷川松治（翻訳）	社会思想社	1967/03
390./S	漂流前線― The silent war（カッパ・ビジュアル）	柴田三雄	光文社	1985/12
391.2/M	日本の戦歴	毎日新聞社	毎日新聞社	1967
391.2/M/2	あゝ航空隊　続　日本の戦歴	毎日新聞社	毎日新聞社	1969
391.2/N	人間魚雷回天―命の尊さを語りかける、南溟の海に散った若者たちの真実大型本		ザメディアジョン	2006/04
391.2/T	空の戦争史（講談社現代新書）	田中利幸	講談社	2008/06
391.2/T	一九七二―「はじまりのおわり」と「おわりのはじまり」	坪内祐三	文藝春秋	2003/04
391.2/Y/1	零戦燃ゆ〈１〉（文春文庫）	柳田邦男	文藝春秋	1993/06
392.1/E	軍事大国日本の行方―アジアの軍事情勢と日本の安全保障を考える	江畑謙介	ベストセラーズ	1995/05
392.1/F	迫る危機　自衛隊と兵器産業を告発する	福島菊次郎	現代書館	1970
392.1/F	自衛隊はかならず敗ける　防衛の原点にかえれ	藤井治夫	三一書房	1980
392.1/I	皇軍兵士の日常生活（講談社現代新書）	一ノ瀬俊也	講談社	2009/02
392.1/J	自衛隊	朝日新聞社	朝日新聞社	1968
392.1/K	隊友（とも）よ、侵略の銃はとるなドキュメント・市ヶ谷反戦自衛隊の闘い	小西誠	新泉社	1989
392.1/M	市民版防衛白書 Q&A（講談社文庫）	前田寿夫	講談社	1988/05
392.1/M	市民版防衛白書―しのびよる戦争の恐怖（講談社文庫）	前田寿夫	講談社	1986/07
392.1/S	昭和陸海軍の失敗―彼らはなぜ国家を破滅の淵に追いやったのか（文春新書）	半藤一利（著），秦郁彦（著），平間洋一（著）	文藝春秋	2007/12
392.1/S	素顔の自衛隊　日本の平和と安全	毎日新聞社	毎日新聞社	1968
392.1/U	在日米軍（岩波新書）	梅林宏道	岩波書店	2002/05
392.1/Y	日本陸海軍の生涯　相克と自壊	吉田俊雄	文春文庫	2001
392.1/Y/1	私の中の日本軍（上）（文春文庫（306-1））	山本七平	文藝春秋	1983/05
393.2/O	赤紙―男たちはこうして戦場へ送られた	小沢真人（著），NHK 取材班（著）	創元社	1997/07
393.2/U	有事法制か、平和憲法か―私たちの意思が問われている	梅田正己	高文研	2002/05

395./K	風の記憶―日出生台・沖縄フォト・ドキュメント '96～ '97（海鳥フォト・ブックス）	『風の記憶』刊行会（編集）	海鳥社	1998/11
429.5/K	原子核の世界第二版	菊池正士	岩波新書	1973
451.6/N	カラー　雲　その生態と天気予想 山溪カラーガイド15		山と渓谷社	1971
451/W	雨・風・寒暑の話	和達清夫・倉嶋厚	NHK ブックス	1977
460.3/K	植物動物　採集図鑑	川西良吉	東雲堂	1955
460.7/H	自然観察入門	日浦勇	中公新書	1975
469/H	骨を読む	埴原和郎	中公新書	1965
480.4/S	シートン動物記（上）	小林清之介	旺文社文庫	1976
485.6/N	セミの自然誌―鳴き声に聞く種分化のドラマ（中公新書）	中尾舜一	中央公論社	1990/07
486./F/1-1	完訳 ファーブル昆虫記 第１巻 上	ジャン＝アンリ・ファーブル（著），奥本大三郎（翻訳）	集英社	2005/11
486/F/1	昆虫記　第１分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/10	昆虫記　第10分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/11	昆虫記　第11分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/12	昆虫記　第12分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/13	昆虫記　第13分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/14	昆虫記　第14分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/15	昆虫記　第15分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/16	昆虫記　第16分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/17	昆虫記　第17分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/18	昆虫記　第18分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/19	昆虫記　第19分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/2	昆虫記　第２分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/20	昆虫記　第20分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/3	昆虫記　第３分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/4	昆虫記　第４分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/5	昆虫記　第５分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/6	昆虫記　第６分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/7	昆虫記　第７分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/8	昆虫記　第８分冊	ファーブル	岩波書店	1975
486/F/9	昆虫記　第９分冊	ファーブル	岩波書店	1975
488./S	カラスの早起き、スズメの寝坊―文化鳥類学のおもしろさ（新潮選書）	柴田敏隆	新潮社	2002/07

488.5/Y	八代のナベヅル大型本	ナベヅル環境保護協会	中国新聞社	1998/03
489.5/R	オオカミ―こわがりサムソンの冒険（ジュニア写真動物記（23））	B・ロートハウゼン	平凡社	1985/01
489.5/T	キタキツネの詩	竹田津実	サンリオ	1977
490.1/Y	病院で死ぬということ	山崎章郎	主婦の友社	1990/10
490.1/Y	続病院で死ぬということ―そして今、僕はホスピスに	山崎章郎	主婦の友社	1993/07
491.1/R	死体はみんな生きている	メアリー・ローチ（著），殿村直子（翻訳）	NHK 出版	2005/01
491.3/N	41歳寿命説―死神が快楽社会を抱きしめ出した（センチュリープレス）	西丸震哉	情報センター出版局	1990/07
493.1/H	内部被曝の脅威ちくま新書（541）	肥田舜太郎（著），鎌仲ひとみ（著）	筑摩書房	2005/06
493.1/K	内部被曝の真実（幻冬舎新書）	児玉龍彦	幻冬舎	2011/09
493.1/S	写真集　水俣　MINAMATA	W Eugene Smith	三一書房	1980
493.1/T	糖尿病毎日のおかず―怖い失明からあなたを守る（ここを変えるシリーズ）		女子栄養大学出版部	1998/07
493.2/H	高血圧はもう病気ではない―タンパク質で治す食事の医学	堀江良一	主婦の友社	1984/11
493.7/O	ひとりひとりの人―僕が撮った精神科病棟	大西暢夫	精神看護出版	2004/06
494.5/K	それでもがん検診うけますか―専門医が教える本当の話	近藤誠	NESCO	1994/10
494.5/K	患者よ、がんと闘うな	近藤誠	文藝春秋	1996/03
496.4/Y	色盲色弱は治る生き方に自信がつく	山田紀子	KK ベストセラーズ	1980
498./F	医療を裁く―地に堕ちた日本の医療	藤林貞治	有朋社	1982/01
498.1/A	北里大学病院24時―生命を支える人びと	足立倫行	新潮社	1989/11
498.3/0	体にまかせる健康法	岡島治夫	潮文社	1979
498.3/S	太陽とともに生きる	アリシア・ベイ・ローレル、ラモン・センダー	草思社	1975
498.4/O	奇形猿は訴える　人類への警告	大谷英之	よつ葉連絡会出版局	1977
498.9/U	死体は語る	上野正彦	時事通信社	1989/09
519./I	地球を殺すな！―環境破壊大国・日本	伊藤孝司	風媒社	2004/12

519./N/4	環境ホルモン―人心を「撹乱」した物質（シリーズ・地球と人間の環境を考える）	西川洋三	日本評論社	2003/07
519.1/S	グリーンプロシューマリズム―「消費」を超えて	斎藤実男	同文舘出版	1999/11
519.8/S/2	続・水辺の環境学―再生への道をさぐる	桜井善雄	新日本出版社	1994/05
519/F	日本の戦後を考える公害日本列島	福島菊次郎	三一書房	1980
519/F	人間の鎖	藤野幸平	人間の鎖刊行会	1988
519/I	改訂　公害・労災・職業病年表	飯島伸子	公害対策技術同友会	1979
519/N	汚染物質	長崎誠三	新日本新書	1974
519/S	恐るべき公害	庄司光・宮本憲一	岩波新書	1964
519/U	公害の政治学　水俣病を追って	宇井純	三省堂新書	1970
521/M	大工道具の歴史	村松貞次郎	岩波新書	1973
527.6/R	厠まんだら	李家正文	雪華社	1961
527/U	日本人とすまい	上田篤	岩波新書	1974
538.9/T	はてしない宇宙へ	ニコラエワ・テレシコワ	プログレス出版所	1963
539./K	脱原発の経済学	熊本一規	緑風出版	2011/11
539./O	黒い絆　ロスチャイルドと原発マフィア	鬼塚英昭	成甲書房	2011/05
539./T	原発とヒロシマ――「原子力平和利用」の真相	田中利幸，ピーター・カズニック	岩波書店	2011/10
539/T	プルトニウムの恐怖	高木仁三郎	岩波新書	1981
543.4/N	流転チェルノブイリ2007～2014	中筋純	二見書房	2014/04
543.5/A	原発はなぜこわいか 増補版	天笠啓祐（著），勝又進（イラスト），小野周（監修）	高文研	1986/07
543.5/A	国策の行方―上関原発計画の20年	朝日新聞山口支局（著）	南方新社	2001/08
543.5/A/1	プロメテウスの罠―明かされなかった福島原発事故の真実	朝日新聞特別報道部（著）	学研パブリッシング	2012/03
543.5/A/2	プロメテウスの罠２	朝日新聞特別報道部（著）	学研パブリッシング	2012/07
543.5/A/3	プロメテウスの罠〈３〉福島原発事故、新たなる真実	朝日新聞特別報道部（著）	学研パブリッシング	2013/03
543.5/A/4	プロメテウスの罠〈４〉徹底究明！福島原発事故の裏側	朝日新聞特別報道部（著）	学研パブリッシング	2013/03
543.5/G	ゴーマニズム宣言 SPECIAL 脱原発論	小林よしのり	小学館	2012/08

543.5/G	「原発を考える」第13回ドキュメンタリーフォトフェスティバル宮崎	樋口健二・森住卓	「ドキュメンタリーフォトフェスティバル宮崎」実行委員会	2012
543.5/H	東京に原発を！（集英社文庫）	広瀬隆	集英社	1986/08
543.5/K	東電福島原発事故総理大臣として考えたこと（幻冬舎新書）	菅直人	幻冬舎	2012/10
543.5/K	がれき処理・除染はこれでよいのか	熊本一規（著），辻芳徳（著）	緑風出版	2012/06
543.5/K	騙されたあなたにも責任がある脱原発の真実	小出裕章	幻冬舎	2012/04
543.5/O	原発のコスト―エネルギー転換への視点（岩波新書）	大島堅一	岩波書店	2011/12
543.5/S	【原発紙芝居】子どもたちの未来のためにとても悲しいけれど空から灰がふってくる	斉藤武一	寿郎社	2013/04
543.5/T	原子力発電	武谷三男	岩波新書	1976
543.5/U	原発難民放射能雲の下で何が起きたのか（PHP 新書）	烏賀陽弘道	PHP 研究所	2012/10
543.5/ϒ	祝島日誌	原発いらん！下関の会	原発いらん！下関の会	2013
543/H	原発	樋口健二	オリジン出版センター	1979
556.9/N	陸軍潜水艦隊―極秘プロジェクト！深海に挑んだ男たち	中島篤巳	新人物往来社	2006/07
559.7/M	セミパラチンスク―草原の民・核汚染の50年	森住卓	高文研	1999/09
559.7/M	イラク・湾岸戦争の子どもたち―劣化ウラン弾は何をもたらしたか	森住卓	高文研	2002/04
559/H	毒ガス島大久野島毒ガス棄民の戦後	樋口健二	三一書房	1983
559/K	日本の兵器工場	鎌田慧	潮出版社	1979
567./S	戦争と筑豊の炭坑―私の歩んだ道	「戦争と筑豊の炭坑」編集委員会（編集）	碓井町教育委員会碓井町立碓井平和祈念館	1999/07
567/S	写真万葉録・筑豊10　黒十字	上野英信	葦書房	1986
579.1/I	接着の科学	井本稔・黄慶雲	岩波新書	1965
588.5/M	ドブロクをつくろう	前田俊彦	農山漁村文化協会	1981
590/A	割りばしから車まで　消費者をやめて愛用者になろう！	秋岡芳夫	柏樹新書	1971

594.9/K	藍染めと更紗のパッチワーク・キルト（〔正〕）	黒羽志寿子	婦人生活社	1983/01
596./M	電子レンジ料理入門塾―こんなにかんたんこんなにおいしい（婦人生活ファミリークッキングシリーズ）ムック	村上祥子	婦人生活社	2002/05
596.2/B	房総のふるさと料理	小倉章	農業千葉刊行部	1978
596.2/F	フラガ神父の料理帳―スペイン家庭の味大型本	セサール・フラガ（著），池田宗弘（イラスト）	ドン・ボスコ社	2010/04
596/0	男の料理		小学館	1979
601.1/S	過疎を逆手（サカテ）にとる―中国山地からのまちづくりニュー・ウェーブハードカバー	指田志恵子	あけび書房	1984/10
610.4/S	都市生活者のためのほどほどに食っていける百姓入門	坂根修	十月社	1985
610.4/T	たまご革命	たまごの会	三一書房	1979
611.2/M	旅農民のうた　裏石垣開拓小史	森口豁	マルジュ社	1985
611.9/T	鍬と聴診器	竹熊宜孝	柏樹社	1981
613.4/Y	有機質肥料のつくり方使い方	農文協	農山漁村文化協会	1982
615./Y	生命の医と生命の農を求めて	梁瀬義亮	地湧社	1998/02
615/D	栽培植物の起源	田中正武	NHK ブックス	1977
620.4/K	田園博物誌	草川俊	朝日新聞社	1976
625/M	庭先果樹のつくり方　―つくる楽しみ・食べる楽しみ―	前田知	農山漁村文化協会	1985
626./K	誰でもできる野菜の自然流栽培―有機農業のプロの手ほどき	古賀綱行	農山漁村文化協会	1986/02
626.2/Y	野菜つくりの実際　果菜	岡昌二	農山漁村文化協会	1972
626.4/Y	野菜つくりの実際　根茎菜	岡昌二	農山漁村文化協会	1983
626.5/Y	野菜つくりの実際　葉菜	岡昌二	農山漁村文化協会	1983
626/K	野菜の歳時記	草川俊	TBS ブリタニカ	1981
626/Y	カラー　野菜の花　山溪カラーガイド70		山と溪谷社	1976
645.6/I	ニッポンの犬（新潮文庫）	岩合光昭（著），岩合日出子（著）	新潮社	2001/12

645.6/T	犬たちの隠された生活	エリザベス・マーシャルトーマス（著），Elizabeth Marshall Thomas（原著），深町真理子（翻訳）	草思社	1995/08
645.6/T	イヌ・ネコ・ネズミ―彼らはヒトとどう暮してきたか（中公新書）	戸川幸夫	中央公論社	1991/08
660.2/I	日本漁民史　海に生きる人々の生活と歴史	石田好数	三一書房	1978
664.6/W	明石海峡魚景色	鷲尾圭司	長征社	1989
666.9/M	熱帯魚	牧野信司	集英社	1966
687.9/E	壊死する風景―三里塚農民の生とことば（復刻・シリーズ1960/70年代の住民運動）	のら社同人	創土社	2005/11
687.9/S	三里塚アンソロジー	宇沢弘文	岩波書店	1992/10
687.9/S	大地をうてば響きあり　十八年目の三里塚	三里塚芝山連合空港反対同盟	社会評論社	1984
687/F	戦場からの報告　三里塚・終わりなきたたかい	福島菊次郎	社会評論社	1980
699.2/A	わたしの民間放送史　出会いを求めて	新井和子	評論社	1979
701/S/1	芸術論ノートⅠ	佐々木基一	オリジン出版センター	1978
701/S/2	芸術論ノートⅡ	佐々木基一	オリジン出版センター	1979
702.1/F	ふるさとのアーティストたち	やまぐち県民文化祭実行委員会	やまぐち県民文化祭実行委員会	2002
702.1/T	戦後日本のリアリズム1945-1960	名古屋市美術館	戦後日本のリアリズム展実行委員会	1998
702.2/U	Ancient Oriental Art	AkiraUeda	Gallery Ueda	1981
702.3/I	レオナルド・ダ・ヴィンチ（ビジュアル選書）	池上英洋（監修）	新人物往来社	2012/04
703.8/S	没後50年「知られざるロバート・キャパの世界」展	毎日新聞社	毎日新聞社	2004
703.8/W	2nd World Exhibition of Photography			1969
704/R	論集「視覚の昭和」	松戸市教育委員会	松戸市教育委員会	1999
706.9/K	グラフィック・写真・漫画部門主要所蔵作品図録1988	川崎市市民ミュージアム	川崎市市民ミュージアム	1988

706.9/T	The 4th Tokyo Triennial	東京トリエンナーレ実行委員会	日本ジュウリーデザイナー協会	1979
706.9/T	妻ガラに捧げる　ダリ　愛の宝飾		ミナミ美術館	1986
706.9/U	動きとかたち	山口県立美術館	東和町など	1986
720.4/I	夢・現・記　一画家の時代への証言	池田龍雄	現代企画室	1990
721.9/F	独座の宴―船田玉樹画文集	船田玉樹	求龍堂	2012/07
721.9/M	「原爆の図」ヒロシマ展	丸木位里・丸木俊	原爆の図丸木美術館	1988
721.9/T	田中一村作品集―NHK日曜美術館「黒潮の画譜」大型本	田中一村	日本放送出版協会	1985/08
721/M	原爆の図	丸木位里・丸木俊	田園書房	1968
723.1/K	憲法マイルド考―21世紀への道しるべ	小林直樹（編集），はらたいら（編集）	北泉社	1987/04
723.1/K	春夏秋冬	谷川俊太郎（編集），香月泰男	新潮社	1993/10
723.1/M	風の吹くまま―松田正平画文集単行本	松田正平	求龍堂	2004/01
723.1/M	宮崎美恵子作品集	宮崎美恵子	プラニングハウス	1994
723.3/S	シャルロッテ　愛の自画像		印象社	1988
726.5/A	きつねのざんげ　原典イソップ	安野光雅	千趣会	1974
726.5/F	ゆかいなのみのパピプペポ（講談社の幼児えほん）	舟崎靖子（著），なかのひろたか（イラスト）	講談社	1986/07
726.5/K	ぬりええほん　ひゃくばんめのサル	きたむらゆみ・ケン・キース・ジュニア	カタツムリ社	1986
726.5/M	この旗	むらなかじゅん	楽座	1999
726.5/N	広島の原爆（福音館の科学シリーズ）大型本	那須正幹（著），西村繁男（イラスト）	福音館書店	1995/03
726.5/V	アンジュール―ある犬の物語大型本	ガブリエルバンサン	ブックローン出版	1986/05
726.6/T	石になったマーペー―沖縄・八重山地方の伝説から	谷真介（著），儀間比呂志（イラスト）	ほるぷ出版	1985/05
727/K	カット図案集		野ばら社	1978
728.2/T	戦後を拓いた歌人の書	豊田清史	創元社	1998
740./P	PhotoPre〈No. 6〉読む写真集。見る写真論。		窓社	2004/02
740./S	写真年鑑2011―写真いま、ここに（日本カメラMOOK）		日本カメラ社	2011/05
740./S/2008	写真年鑑2008―写真いま、ここに（日本カメラMOOK）ムック		日本カメラ社	2008/05

740.2/I	もうみんな家に帰ろー！―26歳という写真家・一ノ瀬泰造	一ノ瀬信子	窓社	2003/05
740.2/I	日本写真発達史	伊藤逸平	朝日ソノラマ	1975
740.2/I	日本ヌード写真史	伊藤逸平	朝日ソノラマ	1977
740.2/S	写真の歴史入門第３部「再生」戦争と12人の写真家（とんぼの本）	鈴木佳子（著），東京都写真美術館（監修）	新潮社	2005/07
740.2/S	昭和の風景（とんぼの本）	東京都写真美術館（編集）	新潮社	2007/04
740.2/T	写真の歴史入門第２部「創造」モダンエイジの開幕（とんぼの本）	東京都写真美術館（著），藤村里美（監修）	新潮社	2005/05
740.2/W	キャパ―その青春	リチャードウィーラン（著），沢木耕太郎（翻訳）	文藝春秋	1988/06
740.3/N	日本現代写真史展―終戦から昭和45年まで―	日本写真家協会	日本写真家協会	1975
740.3/S	戦後写真・再生と展開　1945-1955	山口県立美術館	山口県立美術館	1990
740.3/S	写真家はなにをみたか・1945～1960	昭和写真史編纂委員会	コニカプラザ	1991
740.3/Y	山口県立美術館コレクション写真展写真にみる戦後日本	砺波市美術館	砺波市美術館	2007
740.4/N	写真編集者―山岸章二へのオマージュ	西井一夫	窓社	2002/01
740.4/S	新版写真のワナ	新藤健一	情報センター出版局	1994/04
740.6/N	日本のコンテンポラリー―写真をめぐる12の指標―	東京都写真美術館	東京都文化振興会	1990
740.8/A/3	アサヒカメラ教室第３巻スナップ写真	朝日新聞社	朝日新聞社	1970
740/J	11人の1965～75	山口県立美術館	山口県立美術館	1989
740/S	写真リアリズム268号（2007年）モノクロームを考える	日本リアリズム写真集団（著）	日本リアリズム写真集団	2007/00
740/S	昭和の記憶　写真に甦る人々の情景	群馬県立館林美術館	群馬県立館林美術館	2006
740/S	佐々木雄一郎写真展パンフレット		広島平和記念資料館	2010
748./A	陽子（荒木経惟写真全集）（英語）	荒木経惟	平凡社	1996/02
748./F	カミサマホトケサマ―船尾修写真集	船尾修	冬青社	2008/09

748./H	オーロラの彼方へ― Michio's Northern Dreams〈1〉(Michio's Northern Dreams 1)	星野道夫	PHP エディターズグループ	2001/11
748./H	新・人間の戦場	広河隆一	デイズジャパン	2012/00
748./I	子いぬたち大型本	岩合光昭	山と溪谷社	1992/12
748./I	re-birth ガレキの隣のオンナたち―今岡昌子写真集大型本	今岡昌子	窓社	2003/06
748./N	日本写真全集(10)フォトジャーナリズム大型本	小沢健志(編集),第一アートセンター(編集)	小学館	1987/10
748./S	Lost China ―斎藤亮一写真集大型本	斎藤亮一	窓社	2002/11
748./U	OIL 2006 大型本	上本ひとし	冬青社	2007/06
748./U	峠越え2003.8.23～2005.2.28空景―上本ひとし写真集(NC photo books)大型本	上本ひとし	日本カメラ社	2005/10
748./U	白い風―植田正治ベス単写真帖	植田正治	日本カメラ社	1981/01
748/A	アサヒペンタックス写真集			1964
748/B	六ヶ所村　馬場仁写真日記	馬場仁	JPU 出版	1980
748/F	鶴のくる村	福島菊次郎	ギャラリー三匹の猫	2006
748/F	ニッポンの嘘　報道写真家　福島菊次郎90歳	「ニッポンの嘘」製作委員会	ビターズ・エンド	2012
748/F	Faces of Asia　asia documentary photographers association		Korea Foundation Cultural Centre, Seoul	2010
748/H	ドキュメント　10年の記録　三里塚　浜口タカシ報道写真集	浜口タカシ	日本写真企画	1977
748/J	Japan Tokyo Olympic Year	富士写真フィルム	富士写真フィルム	1964
748/K	核―半減期	東京都写真美術館	東京都文化振興会	1995
748/K	心の島　ふるさと豊島	小林恵	鯨吼社	1994
748/K	記録と記憶のトライアングル－韓国、在日、沖縄を撮る10人の眼		実行委員会	
748/L	ZERO An Introduction into Seeing	Bepe Lagadu		1976
748/M	ヤマ　炭鉱　本橋成一写真集	本橋成一	現代書館	1968
748/N	残された楽園　ネイチャーフォトグラフィー		アニマルズ・アンド・アース	1995
748/P	Japan Quest 日本の現実―ある米夫人カメラ探訪―	Jacqueline Paul		1962

748/S	ベトナム戦争	沢田教一	大阪人権歴史資料館	1990
748/S	桑原史成写真集・生活者群像　浪費者社会との訣別	桑原史成	三一書房	1980
748/S	写真集　記憶の里	嶋行比呂	嶋行比呂	1989
748/S/2	世界のびっくりどうぶつ２―地球は今日も、忙しい。	デイズジャパン	デイズジャパン	2014/12
748/T	懐しき中国	戸村慎	美術出版デザインセンター	1980
748/U	海域 KAIIKI	上本ひとし	蒼穹社	2013
750.3/N	第46回　日本伝統工芸展図録		日本伝統工芸展運営委員会	2000
750/M	現代の工芸　―生活との結びつきを求めて―	前田泰次	岩波新書	1975
751.5/Y	ヨーロッパ・アメリカ　ガラス名品展	サントリー美術館		1981
751/H	arrow Exibition	濱中月村 Hamanaka Gesson	濱中月村 Hamanaka Gesson	
752/M	うるしの話	松田権六	岩波新書	1964
753/M	日本古代の色彩と染	前田雨城	河出書房新社	1977
755.3/A	ロストワックス・ジュエリーメイキング		柏書店松原	2006/12
755/I	イタリア・モダンジュウリー展		日本ジュウリーデザイナー協会	1974
755/J	2000 JAPAN JEWELLERY ART COMPETITION	日本ジュウリーデザイナー協会	日本ジュウリーデザイナー協会	2000
755/N	日本のモダン・ジュウリー		レーヌ出版	1978
756.3/S	彫金の技法（改装版）ジュエリーデザイン	塩入義彦	オーム社	1972/01
756/A	総合カタログ	新井光治商店	新井光治商店	1986
756/A	宝飾用工具カタログ GOSHO Tool	赤坂ユニベイス	赤坂ユニベイス	1990
756/H	宝飾用器材総合カタログ Vol. 4		ミラージュ貿易	2000
756/I	金属の工作工芸	石川充宏	開隆堂出版	1982
756/K	Tools & Equipment	キャストハウス	キャストハウス	
756/K	ToolsCatalog	コモキン	コモキン	1999

756/K	WaxPattern800コモキンのワックスパターン	コモキン	コモキン	1986
756/K	Tools Catalog	コモキン	コモキン	1984
759/K	人形愛哀　きふじ早苗和紙人形作品集	山田久米夫	文化出版局	1981
767.8/F	フォークゲリラとは何者か	吉岡忍	自由国民社	1970
767.8/M	放送禁止歌（知恵の森文庫）	森達也	知恵の森	2003/06
779.1/T	裸女の秘技絢爛絵巻―ストリップはいま…（河出文庫）	谷口雅彦	河出書房新社	2002/05
785.2/N	海中散歩でひろったリボン―ボニン島と益田一	中山千夏	KTC 中央出版	2008/02
810.4/A	政・官・財（おえらがた）の国語塾	イアンアーシー（著），Iain Arthy（原著）	中央公論社	1996/11
810.4/M	日本語のために	丸谷才一	新潮社	1974
815/I	私家版　日本語文法	井上ひさし	新潮社	1981
910.2/K	父・水上勉をあるく	窪島誠一郎（著），山本宗補	彩流社	2015/07
910.2/K	回想の三島由紀夫	日本学生新聞社	行政通信社	1971
910.2/M	近代文学についての私的覚え書き―作家たちのさまざまな生き方をめぐって―	三浦泰生	近代文芸社	1983/01
910.2/Y	命	柳美里	小学館	2000/06
910.26/K	菊池寛の時代	金子勝昭	たいまつ社	1979
911./W	わが心の春夏秋冬（生命映えるとき）	潮文社編集部（編集）	潮文社	1997/08
911.1/I	歌集　廣島	豊田清史	第二書房	1954
911.1/K	はなむけ	黒瀬宗二・西川羊司子	福地恭子	1994
911.1/S	さんげ―原爆歌人正田篠枝の愛と孤独（現代教養文庫）	広島文学資料保全の会	社会思想社	1995/08
911.1/S	〈いわれなき罪に問われて〉白きいのち	佐藤誠	合同出版	1967
911.1/T	歌集　幽魂	豊田清史	創元社	2003
911.1/T	生霊　豊田清史歌集	豊田清史	雁書館	1989
911.3/I	草矢射る―石毛博道絵と俳句	石毛博道	平原社	2010/02
911.5/F	詩集　焔の影	福武旦	平凡社	1959
911.5/I	GUANTANAMO グアンタナモ	岩田宏・池田龍雄	思潮社	1964
911.5/I	詩集　別れの時	磯永秀雄	ユリイカ	1959
911.5/I	詩集　海がわたしをつつむ時	磯永秀雄	鳳鳴出版	1971
911.5/I	磯永秀雄作品集	磯永秀雄	長周新聞社	1981

911.5/I	詩集　生きものの歌	磯村秀樹	ユリイカ	1958
911.5/I	詩集　降る星の歌	磯永充能	扉の会	1964
911.5/I	水の女　磯村秀樹詩集	磯村秀樹	アポロン社	1971
911.5/I	詩集　ゆきずりの愛	磯村英樹	昭森社	1965
911.5/I	詩集　したたる太陽	磯村英樹	地球社	1963
911.5/I	詩集　ツタンカーメンのエンドウ豆	磯村英樹	八坂書房	1985
911.5/I	詩集　アザラシ祭り	磯村英樹	ヌーボ社	1962
911.5/I	詩集　水の葬り	磯村英樹	磯村英樹	1973
911.5/I	石女遺文	礒村幸子	ユリイカ	1956
911.5/I	訪中詩集　燃える海	礒永秀雄	長周新聞社	1973
911.5/I	浮燈台	礒永秀雄	ユリイカ	1951
911.5/I	礒永秀雄　作品集	礒永秀雄	長周新聞社	1981
911.5/K	壁の日録―詩集	くにさだきみ	土曜美術社出版販売	2004/05
911.5/K	くにさだきみ詩集（日本現代詩文庫・第二期）	くにさだきみ	土曜美術社出版販売	1998/02
911.5/K	詩集　罪の翻訳	くにさだきみ	視点社	1999
911.5/K	はらっぱのうた　木島始詩集	木島始	晶文社	1983
911.5/K	詩集　ト短調	丸岡忠雄	駱駝詩社	1958
911.5/M	雨ニモマケズ RainWon't 大型本	宮沢賢治（著），こどもくらぶ（編集）	今人舎	2013/11
911.5/M	詩集　蛙出てらっしゃい	片山さよ子	駱駝詩社	1975
911.5/O	詩集　待つとし聞かば	小野静枝	駱駝詩社	1975
911.5/S	詩集　優しいうた	條冬樹	思潮社	1972
911.5/T	詩集　伝説の少女 R へ	堤隆夫	海鳥社	2004/01
911.5/T	詩集　しわがれる歌	辻五郎	駱駝詩社	1965
911.5/T	富永太郎詩集	富永太郎	思潮社	1975
911.5/T	詩集　粘る唾	辻五郎	土曜美術社	1973
911.5/T	詩集　皮膚と対話と	竹内辰郎	頸草書房	1971
911.5/T	詩集　ある朝、いつものように	高垣太刀子	蘭発行所	1982
911.5/T	戦後	武内辰郎	土曜美術社	1975
911.5/W	ひとのあかし単行本	若松丈太郎（著），アーサー・ビナード（英訳）（その他），齋藤さだむ（写真）	清流出版	2012/01
912.7/I	シナリオ被爆太郎伝説	伊藤明彦	窓社	1999/02
913.6/A	歩兵の本領（講談社文庫）	浅田次郎	講談社	2004/04
913.6/A	夢泥棒―睡眠博物誌（新風舎文庫）	赤瀬川原平	新風舎	2004/02

913.6/A	惜しみなく愛は奪ふ	有馬武郎	角川文庫	1964
913.6/D	人間失格【新潮文庫】	太宰治	新潮社	2006/01
913.6/H	永遠の０（講談社文庫）	百田尚樹	講談社	2009/07
913.6/H	帰還の坑道	広河隆一	デイズジャパン	2013/04
913.6/H	みゆきイラストシリーズ１　タウンゼント館		みゆき書房	1969
913.6/I	青葉繁れる	井上ひさし	文春文庫	1974
913.6/I	吉里吉里人	井上ひさし	新潮社	1981
913.6/I	飯沢匡刺青小説集	飯沢匡	立風書房	1972
913.6/I/1	江戸紫絵巻源氏（上）（文春文庫(111-12)）	井上ひさし	文藝春秋	1985/06
913.6/I/2	江戸紫絵巻源氏（下）（文春文庫(111-13)）	井上ひさし	文藝春秋	1985/06
913.6/K	王国の芸人たち	小中陽太郎	講談社	1972
913.6/K	夜空のお星さま	金田末莉子	YCC 出版部	1990
913.6/M	銀河鉄道の夜（角川文庫）	宮沢賢治	角川書店	1969/07
913.6/M	渡された場面（新潮文庫）	松本清張	新潮社	1981/01
913.6/M	宮沢賢治集　昭和文学全集14	宮沢賢治	角川書店	1953
913.6/N	光と風と夢	中島敦	角川文庫	1956
913.6/O	俘虜記（新潮文庫）	大岡昇平	新潮社	1967/08
913.6/O	二人の始発駅	長部日出雄	新潮社	1995/07
913.6/O	カクテル・パーティー	大城立裕	文藝春秋	1967
913.6/S	青さと深さと果てしない海に	白石信夫	あきみず書房	1990
913.6/S	たとえば星のように	白石信夫	あきみず書房	1989
913.6/S	グワオのさようなら	柴田翔	筑摩書房	1980
913.6/S/1	少年Ｈ〈上巻〉（新潮文庫）	妹尾河童	新潮社	2000/11
913.6/S/2	少年Ｈ〈下巻〉（新潮文庫）	妹尾河童	新潮社	2000/11
913.6/S/2	世に棲む日日　二	司馬遼太郎	文藝春秋	1985
913.6/S/3	世に棲む日日　三	司馬遼太郎	文藝春秋	1985
913.6/T	実録小説ああ国民学校	高橋育郎	文芸社	2002/06
913.6/T/2	永遠の仔〈下〉	天童荒太	幻冬舎	1999/02
913.6/U	ファザーファッカー	内田春菊	文藝春秋	1993/09
913.6/U	ノー政の悲劇	薄井清	日本農民新聞社	1980
913.6/W/1	失楽園（上）	渡辺淳一	講談社	1997/02
913.6/W/2	失楽園（下）	渡辺淳一	講談社	1997/02
913.6/Y	８月の果て	柳美里	新潮社	2004/08

913.6/Y	家族シネマ（講談社文庫）	柳美里	講談社	1999/09
913.6/Y	男	柳美里	メディアファクトリー	2000/02
913.6/Y	キッチン（角川文庫）	吉本ばなな	角川書店	1998/06
913.6/Y	白河夜船（角川文庫）	吉本ばなな	角川書店	1998/04
913.6/Y	体は全部知っている	吉本ばなな	文藝春秋	2000/09
914.6/E	大往生（岩波新書）	永六輔	岩波書店	1994/03
914.6/H	永遠の不服従のために	辺見庸	毎日新聞社	2002/10
914.6/H	いま、島で（角川文庫）	灰谷健次郎	角川書店	1998/05
914.6/H	ヒロシマ・ノワール	東琢磨	インパクト出版会	2014/06
914.6/H	死と滅亡のパンセ	辺見庸	毎日新聞社	2012/04
914.6/H	ムツゴロウの結婚記	畑正憲	文春文庫	1974
914.6/I	陽のかなしみ	石牟礼道子	朝日新聞社	1986/12
914.6/K	夕陽妄語	加藤周一	朝日新聞社	1987/04
914.6/K	生きることの意味―ある少年のおいたち（ちくま文庫）	高史明	筑摩書房	1986/01
914.6/K/1	博物誌Ⅰ	串田孫一	現代教養文庫	1971
914.6/M	男のポケット	丸谷才一	新潮社	1976
914.6/M	いのちき　してます	松下竜一	三一書房	1981
914.6/M/1	すべての男は消耗品である。VOL. 1	村上龍	集英社文庫	1993/09
914.6/O	難死の思想	小田実	文藝春秋	1969
914.6/S	バーボン・ストリート（新潮文庫）	沢木耕太郎	新潮社	1989/05
914.6/T	深夜の読書（新潮文庫）	辻井喬	新潮社	1987/05
914.6/U	こんなコラムばかり新聞や雑誌に書いていた	植草甚一	晶文社	1974
914.6/Y	仮面の国（新潮文庫）	柳美里	新潮社	2000/04
914.6/Y	ジョーがくれた石―真実とのめぐり合い	山尾三省	地湧社	1984/12
914.6/Y	コレデオシマイ。	山田風太郎	角川春樹事務所	1996/12
914.6/Y	いまわの際に言うべき一大事はなし。	山田風太郎	角川春樹事務所	1998/10
914.6/Y	あと千回の晩飯	山田風太郎	朝日新聞社	1997/03
914.6/Y	気ままにエッセー　猫の目	吉原雍	ギャラリー三匹の猫	2010
914.6/Y	コムシ・コムサ　―絵の周辺―	吉平泰明	吉平泰明	1991
914.7/K/2	博物誌Ⅱ	串田孫一	現代教養文庫	1971
915.6/S	旅人の時計	佐江衆一	角川書店	1977

915/0	大五郎は天使のはねをつけた	大谷淳子	旺文社	1980
916./C	乳ガンなんかに敗けられない（文春文庫）	千葉敦子	文藝春秋	1987/08
916./M	語りかけるシベリア	丸尾俊介	三一書房	1989/01
916./O	みにくいあひるの子供たち―いま死にたいと思っているあなたへ	岡田ユキ	第三書館	2006/10
916./O	がん生還者の記録（講談社文庫）	大野芳	講談社	1989/11
916./S	戦争―血と涙で綴った証言〈上巻〉単行本	朝日新聞テーマ談話室（編集）	朝日ソノラマ	1987/07
916./S	大往生の島	佐野眞一	文藝春秋	1997/12
916./S	生きる者の記録 佐藤健	佐藤健（著），取材班（著）	毎日新聞社	2003/03
916./T	特攻　最後の証言	『特攻・最後の証言』制作委員会（著）	アスペクト	2006/10
916./T	回天特攻担当参謀の回想―アメリカ海軍最悪の悲劇と特攻作戦	鳥巣建之助	光人社	1995/07
916./W	砕かれた神―ある復員兵の手記（岩波現代文庫）	渡辺清	岩波書店	2004/03
916./Y	「死の医学」への日記（新潮文庫）	柳田邦男	新潮社	1999/03
916./Y	犠牲（サクリファイス）―わが息子・脳死の11日	柳田邦男	文藝春秋	1995/07
916./Y	あゝ回天特攻隊―かえらざる青春の記録	横田寛	光人社	1992/10
916./Y	慰安婦たちの太平洋戦争―秘められた女たちの戦記（光人社 NF 文庫）	山田盟子	光人社	1995/02
916/F	生きた愛した死んだ―獄中文学愛と哀しみの記録	福島末男	東洋出版	1996
916/H	山口のヒロシマ第３集「ヒバクシャと共に」	山口県原爆被爆者福祉会館「ゆだ苑」	山口県原爆被爆者福祉会館「ゆだ苑」	1980
916/H	チェルノブイリの少年たち	広瀬隆	太郎次郎社	1988
916/H	アラビア遊牧民（講談社文庫160）	本多勝一	講談社	1972
916/M	棄てられた四万三千人	三田英彬	三一書房	1981
916/M	悪魔の飽食	森村誠一	光文社	1982
916/U	鎮魂　幸の浦から広島へ	内田正男	たいまつ社	1976
916/Y	日本人への遺書　太平洋戦争生き残りの痛恨	安田武	大光社	1967
918.6/I/22	ゴキブリの歌　五木寛之作品集22	五木寛之	文藝春秋	1974
929.1/C	常緑樹（サンノクス）	シム・フン	龍溪書舎	1981
929.1/K	金南柱詩集　農夫の夜	金南柱	凱風社	1987

933./S/1	コンタクト〈上〉（新潮文庫）	カール・セーガン（著），Carl Sagan（原著），池央耿（翻訳），高見浩（翻訳）	新潮社	1989/07
933./S/2	コンタクト〈下〉（新潮文庫）	カール・セーガン（著），Carl Sagan（原著），池央耿（翻訳），高見浩（翻訳）	新潮社	1989/07
933/B	大地２（新潮文庫990）	パール・バック	新潮社	1954
933/W	ドリアン・グレイの肖像	ワイルド	新潮文庫	1981
936./F	ロスアラモスからヒロシマへ―米原爆開発科学者の妻の手記	フィリスK.フィッシャー（著），橘まみ（翻訳）	時事通信社	1986/07
936/C/1	ワイルド・スワン（上）	ユン・チアン（著），土屋京子（翻訳）	講談社	1993/01
936/C/2	ワイルド・スワン（下）	ユン・チアン（著），土屋京子（翻訳）	講談社	1993/01
940.8/S/5	シュバイツァー著作集第五巻	氷上英廣（訳者）	白水社	1959
940.8/S/7	シュバイツァー著作集第七巻	氷上英廣（訳者）	白水社	1957
945/A	橋の上の男　ヒロシマと長崎の日記	ギュンター・アンデルス	朝日新聞社	1960
953/S	星の王子さま	サン・テグジュペリ	岩波書店	1962
983/D/1	悪霊　上巻	ドストエフスキー	新潮文庫	1971
	藤村誠一遺稿集	藤村誠一	葦書房	1991

2019年７月４日現在

3．旧蔵写真リスト

	整理番号	タイトル	写真	ｺﾝﾀｸﾄ	備考
1	RAH　9－1	「原爆と人間の記録」1章　放射能遺伝傷害の恐怖	48	0	
	RAH　9－2	「原爆と人間の記録」2章　被爆家族	61	0	
	RAH　9－3	「原爆と人間の記録」3章　中村杉松一家の崩壊	69	0	
	RAH　9－4	「原爆と人間の記録」4章　広島三十二年史	76	0	
	RAH　9－5	「原爆と人間の記録」5章　平和都市の原罪	30	0	
	RAH　9－6	「原爆と人間の記録」6章　原爆に奪われた青春	65	0	
	RAH　9－7	「原爆と人間の記録」7章　証言	74	0	
	RAH　9－8	「原爆と人間の記録」8章　40万人の葬列	84	0	
	RAH　9－9	「原爆と人間の記録」9章　過ちをふたたび	30	0	
2	離島物語　5－1	瀬戸内離島物語　①	82	0	
	離島物語　5－2	瀬戸内離島物語　②	86	0	
	離島物語　5－3	瀬戸内離島物語　③予備	80	0	
	離島物語　5－4	瀬戸内離島物語　④予備	74	0	
	離島物語　5－5	瀬戸内離島物語　⑤コンタクト	0	66	
3	No.10	原爆と人間の記録　1章　2章	2	30	
	No.11	原爆と人間の記録　8章　40万人の葬列　広島市役所原爆対策課　過去帳　戦争の結末　ABCCは何をしたのか　コンタクト	2	26	
	No.12	（原爆と人間の記録）	109	0	
	No.13	瀬戸内離島物語　2章台風島　4章女の暮らし　5章原発が来る　10章　島で生きる　不明	40		取材地図有り
	No.14	瀬戸内離島物語　祝島神舞　コンタクト	0	22	
4	No.15	戦後の若者たち　1部～6部	135	0	
	No.16	戦後の若者たち　1部～4部、8部	67	0	
	No.17	戦後の若者たち　5部～6部	77	0	
5	No.18	公害日本列島　ふるさとの海、1部昭和20年代の瀬戸内海　中国海域　陸奥湾　こどもたちはいま	38	0	

	No.19	公害日本列島　4部　足尾古河鉱業の犯罪，7部日本列島の終末（日光）	70	0	
	No.20	公害日本列島　使用分　不明	72	0	
	No.21	公害日本列島　水俣	46	0	
	No.22	公害日本列島　四日市、駿河湾（印刷原稿）、持越鉱山、島の墓場、サギ、ツル（印刷原稿）	39	0	
6	No.23	公害日本列島　四国、北九州、山陽の海、奇形魚（印刷原稿）	75	0	
	No.24	公害日本列島　六価クロム、東京湾の漁業、鹿島（印刷原稿）	68	0	コピー1
	No.25	ピカドン	53	0	
	No.26	原爆30年史、原爆ドーム、小山さんの子ども	0	22	
	No.27	公害日本列島　軍需産業	37	0	
	No.28	全共闘　コンタクトB4	0	55	
	No.29	自衛隊と兵器産業　コンタクトB4	0	47	
	No.30	ピカドン　コンタクト	0	46	
7	No.31	戦争が始まる　6章「日本の原罪」関連か？	87	0	
	No.32	（原爆と人間の記録？）（4章　100人の証言　補）	81	0	
	No.33	いろいろ	27	0	
	No.34	いろいろ	60	0	
	No.35	戦後の若者たち　瀬戸内離島物語　コンタクト	0	37	
8	No.36	戦場からの報告　三里塚終わりなきたたかい	136	0	
	No.37	（写真展示用？ 1）原爆と人間の記録、ピカドン、天皇の親衛隊、戦争が始まる、瀬戸内離島物語、戦場からの報告三里塚 / 終わりなきたたかい、戦後の若者たち、（リブとふうてん関連か？）	114	0	
	No.38	（写真展示用？ 2）	73	0	
	No.39	不明　・原水禁（2枚）ガス弾の谷間からの報告	35	4	
	No.40	天皇の親衛隊	156	0	
	No.41	鶴のくる村 / リブとふうてん	43	0	
		写真合計（枚数）	2613		
		コンタクト合計（枚数）		355	

4．年表

西暦	年齢	福島菊次郎年譜	日本 / 世界の動き
1921		山口県下松市洲鼻に生まれる。	
1923			関東大震災 /「アサヒグラフ」創刊
1927	6	豊井小学校入学。3年生の時から写真を撮り始める。	
1929	8		世界恐慌
1931	10		満州事変始
1933	12	実家の網元が破産し一家離散。下松小学校へ転校。	日本、国際連盟脱退
1934	13	小学校卒業。防府市の時計店に丁稚奉公に出る。	
1936	15		2.26事件。アメリカで「LIFE」創刊
1937	16	祖母死亡。東京に出奔。	日中戦争
1944	23	広島西部第十部隊に入隊後、負傷し除隊。	
1945	24	再び召集を受け、宮崎で敗戦を迎える。	
		兵役から戻り下松駅前で時計店を始める。 12月結婚。	
1946	25	広島に初めて撮影に行く。	
1947	26	時計屋で写真材料店を兼業。	ABCC 設立
1949	28	長男誕生。このころ民生委員を務めるなど福祉に関わり関連する問題の取材を行う。	広島市平和記念都市建設法施行
1950	29	このころからカメラ誌の月例写真に応募。	朝鮮戦争勃発
1951	30	広島の被爆者、中村杉松さん一家を撮影し始める。	
1952	31	次男誕生。	サンフランシスコ講和条約、日米安全保障条約調印、広島原爆死没者慰霊碑除幕式
1954	33		防衛省、自衛隊発足。高度経済成長期へ。
1955	34	徳山市にも写真資材店を開業。	
		このころから月例ベストテン賞受賞。	自由民主党結成
1956	35	長女誕生。	日本原子力研究所設立
1957	36	徳山市でカメラ店を始める。	原爆医療法制定
		写真展「母子寮･孤児」を開催（松島ギャラリー、東京、大阪、山口巡回）。山口県芸術文化奨励賞受賞。	

1958	37	10年に及ぶ被爆者家族の撮影の間に精神に変調をきたし、精神病院に入院。	
1960	39	被爆者一家の10年の記録「ピカドン」が日本写真批評家協会賞特別。徳山市文化功労章受章。	ベトナム戦争始まる。原爆医療法改正。60年安保闘争。
		独学で彫金を始める。	
1961	40	東京に移住。フリーの報道カメラマンとなる。	
		写真集『ピカドン　ある被爆被災者の記録』（東京中日新聞）刊行	
1962	41	写真展「困窮島」開催	
1963	42	アラビア取材旅行。写真展「アラビア　太陽と砂と」開催（富士フォトサロン、東京・大阪）	茨木県東海村日本原子力研究所で原子力発電に成功。
		ベトナム反戦運動を取材し、初めて総合雑誌「現代の眼」のグラビアに掲載される。	
1964	43	ソヴィエト連邦を取材。	
1966	45	写真展「放射能遺伝障害の恐怖」開催	
1967	46	中村杉松さん逝去。朝日新聞国際展に「被爆２世」発表。	
1968		全国小中学校巡回写真展「放射能遺伝障害の恐怖」開催	東大闘争（～69年）
1969	48	学生運動を取材し写真集「ガス弾の谷間からの報告」（MSP 出版）刊行。写真展開催	東大安田講堂事件
1970	49	日本写真家協会を脱退。防衛省に潜入取材し写真集「迫る危機；自衛隊と兵器産業を告発する」（現代書館）刊行。	
		暴漢に襲われ鼻骨骨折。その直後不審火で家を焼かれる。	
1971	50		三里塚第１次行政代執行。
			福島第一原子力発電所営業運転開始。
			昭和天皇原爆慰霊碑に初参拝。
1972	51		沖縄本土復帰。日中国交正常化。
1973	52		オイルショック
1974	53	写真展「捨てられた日本人」開催（ギャラリーアメリア、東京）	
		写真展「放射能の恐怖」開催（ギャラリーアメリア、東京）	
		写真展「日本万歳」開催（ギャラリーアメリア、東京）	
1977	56	母逝去。写真集『戦場からの報告　三里塚終わりなき戦い』（社会評論社）刊行	

		写真展「三里塚11年目の証言」ギャラリーアメリア、東京を皮切りに全国82か所で開催。写真展「戦場からの報告」開催。	
1978	57	写真集『原爆と人間の記録』（社会評論社）刊行	日中平和友好条約。成田空港新空港開港。
		写真展「原爆と人間の記録」全国65か所で開催。写真展「公害日本列島」全国110会場で開催。	
1980	59	写真集『公害日本列島』（三一書房）刊行	
		写真集『戦後の若者たち　叛逆の現場検証』（三一書房）刊行	
		写真展「戦後の若者たち 叛逆の現場検証」開催（ギャラリーアメリア、東京、全国巡回）	
1981	60	写真集『天皇の親衛隊』（三一書房）刊行	写真週刊誌の草分けFOCUS創刊
		写真集『戦後の若者たち　Part 2 リブとふうてん』（三一書房）刊行	
1982	61	周防大島近くの無人島に移住。自給自足の生活を目指す。	中国電力と上関町は祝島沖合４㎞の島に原発建設を発表。
1983	62	写真展「福島菊次郎前仕事展」開催	
1984	63	大島郡東和町（屋代島）へ移住。写真展「ある被爆者の記録」開催	
		上関町の寿島に原発問題の取材のために通い始める。	
1986	65	写真展「ピカドン」開催	
1987	66	胃がん発覚。写真集『戦争がはじまる』（社会評論社）刊行	
		写真展「ある被爆者の記録」開催	
1988	67	胃がんの手術のため入院。入院先の病院で昭和天皇の下血放送を聞き「天皇の戦争責任展」を構想。退院後から準備開始。	
1989	68	５月に名古屋で「天皇の戦争責任展」を開催、以降３年間で全国162か所を巡回展示。	１月昭和天皇死去。６月皇太子、天皇即位。消費税スタート
		写真集『瀬戸内離島物語』（社会評論社）刊行	
		写真展「離島からの報告」（ギャラリーアメリア、東京、全国巡回）、「写真で見る戦争責任」（全国巡回）開催。	
1990	69		湾岸戦争。バブル崩壊の始まり
1991	70	写真展開催「再生と展望」（山口県立美術館；グループ展）、「瀬戸内離島物語」（名古屋）、「福島菊次郎戦後写真展」（東京都立美術館）、「日本バンザイ」（パリ、ベルリン）	

1992	71	写真展「ピカドン」開催	
1994	73	「福島菊次郎 全仕事集 1945 →1994」（A 4 版61頁　資料集）作成、福島菊次郎の写真展を成功させる会編	
1995	74	徳島市ギャラリー「三匹の猫」内に「映像で見る戦後史資料館」を開館	阪神淡路大震災。地下鉄サリン事件。
1996	75	写真展「原発がきた」開催（祝島）	
1999	78	下関市に写真資料館を開館。10年がかりで制作した総点数3300点の作品群「写真で見る日本の戦後」を完成させ、全国に貸し出す。	
2000	79	山口県柳井市に写真美術館を開館。『写らなかった戦争』シリーズの執筆を始める。	「アサヒグラフ」休刊
		祝島にて那須圭子と写真展開催。	
2001	80		9.11米国で同時多発テロ事件。
2002	81		国内メーカーのデジタルカメラ総出荷台数、フィルムカメラを抜く。
2003	82	著書『写らなかった戦後　ヒロシマの嘘』（現代人文社）刊行	
2005	84	著書『写らなかった戦後２　菊次郎の海』（現代人文社）刊行	
		ピースボート内で「目で見る日本の戦後」展開催。世界一周する。その後、日本各地を巡回。	
		「写真はものの見方をどのように変えてきたか 第３部再生」東京都写真美術館で展示。	
2006	85	写真集『鶴のくる村』刊行（自費出版）	
2007	86	御茶ノ水の明治大学にて遺言講演会と写真展「戦争がはじまる」開催	
2008	87	東京府中にて講演会と写真展「遺言 part２」開催	
2009	88	ドキュメンタリー映画『ニッポンの嘘』撮影始まる。DAYS JAPAN にて「孤高のフォトジャーナリスト福島菊次郎」連載始まる。	
2010	89	著書『写らなかった戦後３　殺すな、殺されるな』（現代人文社）刊行	
		東京府中にて写真展「福島菊次郎の仕事展」と講演会「遺言 Part３」開催	
2011	90	震災後の福島を撮影取材。	３月11日東日本大震災、福島第一原子力発電所で原子炉が順次爆発。
2012	91	映画『ニッポンの嘘　報道写真家福島菊次郎90歳』劇場公開	

2013　92　『ニッポンの嘘』上映会、４月柳井市（アクティブ柳井）、９月東京付中ほか各地にて。写真展（横浜新聞博物館）８～10月。11月骨折して入院。

2014　93　東京多摩市で写真展「福島菊次郎全写真展　殺すな、殺されるな」（12月パルテノン多摩）、「写真で見る日本の戦後」（多摩市）

共同通信イメージズが福島菊次郎のネガの版権を取得。

2015　94　永眠

2016　東京付中にて福島菊次郎追悼写真展と講演会「闘え」６月（ゲスト上杉隆）

2017　福島菊次郎写真パネル保存会発足。保存会は恵泉女学園と写真パネル及び遺品に関する保管協定を締結。

参考

・『ニッポンの嘘』巻末年表
・ ロングインタビュー「福島菊次郎の軌跡」巻末　福島菊次郎・略年譜　『写真年鑑2011』、日本カメラ社
・TWELVE PHOTOGRAPHERS IN JAPAN1945~55（山口県立美術館刊行）福島菊次郎略歴、展覧会、作品発表